
姫とナイトとウィザードと ~ナイトの章~

すずはらりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫とナイトとウェイザードと～ナイトの章～

【Zコード】

Z2236X

【作者名】

すずはらりん

【あらすじ】

「道はもうとっくに決めていた。だから後は、走り抜くだけだ」

いつもは何事もない部活の帰り道、井澄は信じがたいものを見た。狼のようでありながら、後ろ足一本で立ち、自分の倍以上大きな黒い獣。そして、ファンタジーな杖を手にした少女。この遭遇が、これまで想像もしなかった世界へと井澄が足を踏み入れるきっかけだった。

『姫とナイトとウェイザードと～ウェイザードの

章～』続編です。

【注意】登場するキャラクターが某漫画のキャラクターに似ていたりします。特にメインでない子たちに顕著

かと…。インスピレーション受けたと言えば聞こえはいいがようするに参考にした結果似すぎてしまったという情けないオチ。なのでそういうのがいやな人は読まないほうがいいと思います。

月も星もその輝きを見せないような夜の中。時折強く吹く冷えた風に草木が揺れ、風の音に混じつて乾いた音をたてる。

そこは都会とは言えず、かといって田舎とも言えない町だ。どちらか答えなければならないとすれば田舎が選択されるだろうほどに、静かで光がない。そんな町の中、一戸建ての住居用家屋が立ち並ぶ住宅街の隅には公園がある。ブランコやすべり台などといった公園としては定番の遊具が設置されており、日が落ちるまでは近所に住む子供たちの姿と声で賑わうような公園だ。しかし、夜の十時ともなれば公園で遊ぶ子供は存在しないし、冷たい外気にさらされるこの場所で夜を明かすなどという強者もいない。

しかし、そこに蠶くものがあった。

ぐちゃり。

なにかが潰れる音がした。

その音をたてただろう影は、標準的な成人男性の三倍はなくとも一倍の大きさはある。それはまさしく影のようにな……いや、闇そのもののように、輪郭さえもが灯りの少ない夜の中に溶けてしまっている。

大きな影が、腕と呼べそうな部位を動かした。その手で、鋭く尖った指先で摘むようにして目の前にあつたものを持ち上げる。

大きな影にとつて、『それ』は玩具であり、また獲物であった。

摘み上げたことにより、慣性の法則にしたがつて『それ』はぶらぶらと重そうに揺れた。それが面白いのか、大きな影は遊ぶようにわざと前後左右に揺らし出した。

「うう……あ、ぐ……」

揺れる《それ》が声を上げた。痛そうに、苦しそうに、低く、掠れた音で呻く。けれど大きな影は《それ》が声を上げたことなど気にしていない様子で遊び続けた。

やがて、大きな影は《それ》を地面へと無造作に落とした。どさり、と重く痛そうな音が他に誰もない公園に響き、それとほぼ同時に「がつ」と《それ》から音が漏れた。それは痛みを訴える声だった。しかし、大きな影はやはりそれには一切頼着しない。揺らして遊ぶのに飽きたから手を離した、それだけの行動だった。

そして、大きな影は無造作に《それ》の上に乗り上げた。

「ぐつ……『』、ふつ……、……つ！」

めり、と決して心地よくないはずの音が地を這い、《それ》の体が地面へとめり込む。もしかしたら大きな声で叫びを上げたい心境だったかもしれないが、そうなった時にはもつすでに叫ぶことなど不可能な状態に追いやられていた。《それ》はもう、はくはくと苦しそうに、空気を求めるように口を動かしながら、その端からどりりとした液体を吐き出すことしかできなかつた。

大きな影は《それ》の端っこを指先で摘み、そして、思い切り引つ張つた。

「つ……！」

もう声さえ出さなかつた。口から漏れたのは押し出された空気だけだった。《それ》は口と目を大きく開き、あちこちからどりとした液体を流して、体を弛緩させた。

大きな影はびちゃびちゃと液体が滴る手元のものを、大きく大きく開いた口の中に放り込み、

その直後、ぐらりとその巨体を傾かせた。

どしん、ともう動かない『それ』よりもずっと重そうな音を立て、大きな影は地面へと倒れ伏した。その頭には、冷たい輝きを放つ大きな氷柱のようなものが何本も突き刺さっていた。倒れた大きな影は、そのままぴくりとも動かなくなつた。

キイ、と金属質な、ともすれば耳を塞いてしまいたくなるような高い音が鳴つた。それは自転車のブレーキの音だつた。公園のすぐ傍に止まつたその自転車の持ち主は、自転車のスタンドを立てることもせずにそれを放り出し、公園の中に飛び込んだ。数秒遅れてがちやん、と倒れる音がしたが、持ち主が気にする様子はなかつた。

自転車の持ち主は息を弾ませた状態のまま、その場に立つて周囲を見回した。倒れている大きな影を見て、そのすぐ傍に放られている残骸を見た。反射的に口元を手で覆つ。

その状態を一言で表現するならば「凄惨」という言葉がぴつたりだつた。

目は大きく開かれたままぴくりとも動かない。ぎょろついているその瞳はすでに濁り切つてゐる。自転車の持ち主を見ているようしていて、その実そこにはもうなにも映つてはいない。

口はだらしなく開かれたまま、これもやはりぴくりとも動かない。そこからはだらだらと黒いものが流れ落ちてゐる。光を当てれば赤色として認識できるだらう。

右の腕は、存在しなかつた。右の肩から曲線を描くようにパーツが欠け落ちており、衣服は黒く染まつてゐた。これも、口から流れているもの同様、光を当てればやはり赤いのだらう。

胸から腹にかけては、地面にめり込む形でひしゃげてゐた。背骨はいくつかの骨を繋ぎ合わせてあるのだからある程度は曲がるものだ。しかし、そんな体の仕組みは意味を持たないかのように、不自然にひしゃげてゐた。衣服や肉に隠されているが、背骨も肋骨も、目を当てられない状態になつてゐるだらう。

腹から下は、なかつた。

自転車の持ち主は、それを確認すると再度大きな影が倒れていた

はずの場所に視線を向けた。大きな影は消えていた。その名残すらすでに消失していた。代わりと言わんばかりに、そこには腹から足までのパー^ツが転がっている。

生きたまま引きちぎられたのだらうといつては、容易に想像できた。

その光景すべてを確認し終えた自転車の持ち主は、ようけのうに数歩後ずさり、握った拳を震わせた。

「……くそー」

自転車の持ち主は、沈痛で、後悔にまみれた声を吐き出し、右手の中にある長い棒状のものを強く握り締めた。体の震えがそれにまで伝わり、白いそれが闇の中でかすかに揺れる。

自転車の持ち主は、しばらくその場に立ち尽くした。しかし、すでにこの場においてできることはなにもなかつた。

数分後、自転車の持ち主はようやくあきらめたようにか細く息を吐き出した。空を仰ぐが、そこには月も星も姿がなく、慰めにも気分転換にもならなかつた。

再度、もう一度と瞬くことのない濁つた瞳を見る。苦痛と恐怖に染まり、歪み、固まつてしまつた表情を見る。咽返るような血のにおいが充満する公園の中で、自分の失態を呪うように下唇を噛み、眉間に皺を刻み、目の前の光景を胸の中に、記憶の中に焼き付ける。間に合わなかつた。それは取り返しのつかないことだつた。謝罪も懺悔も、どんな言葉もすでに意味はない。理解しているからこそ、目の前の光景から目を背けることはできなかつた。

やがて、自転車の持ち主は、教えなかつた名前も知らない誰かに向けて合掌し、数秒ほど黙祷を捧げた。

それが終われば、凄惨な様相の亡骸にぐるりと背を向け、その場をそのままにして、倒れた自転車を起こし、それに乗つて姿を消した。

走るのが好きだ。

後方へと流れる風を全身で感じながら、なんとはなしに、しかし強く思う。

ゴールとなるグラウンドの片隅にあるネット群だけを目指し、ひたすら走る。周囲の色も音も遠くなり、ただ走る。

勢いのままネット群の前を滑るように通り過ぎてから徐々に減速し、ようやく息が上がっていることを直覚する。この息苦しさはあまり好きじゃないが、走っている瞬間の爽快さはなにも代えられない。いつもは思わず顔をしかめるような冷たい空気も、今は火照った体に心地よく感じる。汗をかいたから、このままでいたら風邪ひきそうだけど。

足を止め、空を見上げる。薄い灰色の雲が空を覆い隠していて、爽快さ半減だ。見るんじやなかつた。

「お疲れさま、井澄くん。はい、タオル。はやく汗拭かないと、風邪引くよ」

「おお、サンキュー高坂」

マネージャーの高坂がタオルを差し出してくれたので、感謝して受け取る。高坂は部員全員が認めるくらい優秀なマネージャーだ。いまだかつて、どのタオルが誰のものなのか、間違えたことがない。こんなこと程度で優秀だと言われても高坂としては微妙だろうが。いや、タオルのことだけじゃなく、対戦校のデータのまとめとか、ほんとすごいんだ。試合つてなると、高坂が作った対策ノートに部員全員が助けられたもんだ。

俺がタオルを受け取って軽く汗を拭き始めると、高坂はすぐに、今俺がやってきた方向へと足を向けた。

「お疲れさま、真嶋くん」

「また井澄がイチバンかー！」

後方から追いついてきたらしい部活仲間の真嶋が悔しそうに声を上げた。俺は真嶋を振り返り、にやりと笑つてやつた。

「そー簡単に抜かされちゃ、元陸上部の名折れだからな」「ちえー」

真嶋もまた、軽い調子で「サンキュー」と言しながら高坂からタオルを受け取り、汗を拭ぐ。その後方から白い息を吐き出しながらこつちに向かつてくるもう一人の姿が見える。

「お疲れ御端ー」

「お、おつか、れつ……一人とも、速い、ね……！」

「御端も十分はえーよ。ま、俺や井澄ほじじやねーけどさー」「う、うんー！」

どもる癖がある御端も、真嶋同様部活仲間だ。

俺と、真嶋と、御端。三人ともクラスは一年九組。つまりクラスメートってわけだ。部内で足の速さトップ3（ついでに身長もどんぐりの背比べ……）これは激しくどうでもいい）が同じクラスつてどんな偶然だ、と何ヶ月か前には部員みんなで笑つたものだ。

「お疲れさま、御端くん。はい、タオル

「あ、あ、ありが、とー！」

俺や真嶋同様、やつぱりどもりながら感謝の言葉を告げて高坂からタオルを受け取る御端の横で、俺と真嶋は次の練習メニューの話

題に移る。

「次、柔軟だよな」

「おお」

「御端、一緒にやるーぜー。」

「うーんー。」

「いやいや、待て待て。お前らちょっとは学習しろ。間壁が怒るだろーが」

飛びつかんばかりの勢いで御端に對して身を乗り出す真嶋の襟首を掴んで引っ張る。「御端も元気よく頷くんじゃないだろうけどな。りたい。言つてやつたところで真意は伝わらないだろうけどな。間壁は短気かつ無駄に心配性で、御端のことによく口を挟む。その大半が心配による行動の制限であり、特に真嶋と一緒にだとその傾向が顕著だ。別に真嶋と一緒にいるなつてわけじゃなくて、単に真嶋に引っ張られて御端まで無茶して怪我したりしないかとひやひやしているわけだ。また、御端も基本的に間壁に口答えしないもんだから、間壁の口出しがエスカレートしがちになる。

まあな、間壁の気持ちもわからなくもないよ。真嶋はすつづーアクティブで「ione-ingマイウェイだし、部内一の元気つ子かつやんちやつ子だ。俺だつて、真嶋と御端が一緒にいると危なつかしくは思つ。けど、どう考へても間壁は心配しすぎだ。真嶋だつて御端だつて、それそれなりにちゃんと考へてんだから。三度のメシと同じくらい好きな野球ができなくなる状況に、誰が自分から飛び込んでいくよ。いくら間壁がキャッチャーで御端がピッチャーだからつて、うざこにもほどがあるだろ。

真嶋が面白くなさそうな顔をする。

「いーじゃねーか別にー」

「俺に言つなよ、間壁に言え」

「う、え、えつと……？」

……まあ、加えて御端が若干天然っぽいのも、間壁の心配性に拍車かける気もしなくはない。そういう点では俺もたしかに心配だ。詐欺とかの被害にあいそつで。

「んじゃ 井澄が御端と組めよ。だつたら間壁も文句言わないだろー
しさー！」
「は？」

いや、別に俺じゃなくてむじひ間壁と組ませてやつたら安心だと
思つんだけど。間壁が。

言ひ返す前に真嶋はぐるりと方向転換。

「てーらつもとー！ 柔軟しよーぜーーー！
「あー！？ つたく、元気だな真嶋は……」
「じゅうなーん！」
「わーつた、わーつた！ けどもうちょっと休ませうー。」
「寺本ナンジャクだなー」
「お前の元気さが異常なんだよー！」

続々と「ホールに到着する部員たちの中から我らがキャプテン・寺本を選び出し（これはおわらぐ、単に一番近い位置にいたからだ）、駆け寄つていく真嶋。

寺本の声に心中でだけ同意を返して、俺とともに取り残された御端を見る。御端は困った顔をして寺本にじやれついている真嶋を見ている。次いで、間壁の姿を探す。すでに「ホールにはたどり着いているが、今日の前でタオルの受け渡しが行われているところだ。見たところ、呼吸が落ち着くまでもうしばらくかかりそうな感じだ。十一月中旬。冬の足音が聞こえてきそうな秋。すでに乾いた冷気

が充満している。ランニングのために汗もかいしている。いくら鍛えていると言つても、このまま突つ立つてたら風邪を引くだろう。
……ま、いつか。間壁だつて、御端が風邪引くのは不本意だろうし。

ほとんど汗を拭けてない御端に田を向けて、言ひ。

「とりあえず、ちゃんと汗拭けよ。そんでも柔軟しようぜ」
「う、うん。……あの、い、井澄、くん」
「ん？」
「よ、よろしく、お願ひします……」

馬鹿丁寧に頭を下げられた。こんなこと程度で、と部内短気代表の間壁なんかはイラつとくるんだろう。俺は、もう御端のそういう行動にも慣れてて、そういうのが御端だつて思つてゐから、「おー」と軽く返した。

* * *

俺が所属する北上里高校野球部は、今年新設のできたてほやほや野球部だ。正確には、何年か前に一度廃部になつたのが復活したらしい。

部員は全員一年生。過去の経験や積み重ねという実績は一切ないし、普通の公立高校だから特に野球が上手いやつが集まるわけでもなく、新設なもんだから人数も少ない。部員十一人、うち一人はマネージャー。プレーヤーは十人。正直、かなり、ギリギリだ。

と、まあ、マイナス面はたしかにあるけど、俺は現状を悲観してはいない。というか、むしろ楽しくてたまらないくらいだ。

俺が野球をするようになったのは、実は中学一年生になつてから

だつた。それまでは陸上部の所属だつた。単純に走るのが好きだつたからだ。

走るのが好きだ。周囲を置き去りにするように駆け抜ける爽快感がたまらない。けれど、陸上はひとりきりだ。部活仲間はそれなりに仲が良かつたが、コースに立てばみんなひとりだつた。自分ひとりの力で駆け抜けなければならなかつた。それを不満に思つたことはなかつたけど、少しさみしいとは思つていた。

ところがある日、野球部に所属するクラスメートから練習試合の助つ人を頼まれ、それを引き受けて以来、俺の日常は一変した。野球はみんなで勝ち抜くスポーツだ。バットを振りぬき、ボールにぶつけ、墨に出る。ここまで特になんとも思わなかつた。しかし、ホームに戻つた瞬間、本来の部員でもない俺を嬉しそうな笑顔で歓迎した野球部の連中に、「いいなあ」と思わされた。

誰かが上手いことやれば我がことのように喜び、誰かが失敗すれば背中を叩いて強く励ます。そういう触れ合ひが、「いいなあ」と思つた。

それだけと言えば、それだけだ。けど、この「いいなあ」が原動力になり、俺は陸上をやめて、野球に打ち込むようになつた。

別に、メジャーなどこで言えばサッカーだつてチーム戦だし、そつちも嫌いじやないんだけどな。どうも俺は、ボールを蹴るよりバットを握つて振るほうが好きらしい。

幸い、元々運動神経はいいほうだし、動体視力もそれなりによかつたからか、すぐ試合に出れるようになつた。もっとも、そんなに強い部じやなかつたけどな。

基本的に体を動かすのが好きだから練習もそんなに嫌いじやなかつたけど、試合のほうが部活仲間との絆みたいなものを感じられた。そういう経験をして、ますます野球にはまつていつた、というわけだ。

高校は、行けそななら公立に行つてくれとおふくろに言われて、特に野球部の強さとか考えないで、通いやすそな立地かつ自分の

成績で行けそうなところ、といつ理由で北上里高校を選んだ。最初は、野球部がないってことでどうするか悩んだんだけど、下見の時に偶然にも野球部の顧問をする予定だという先生に会うことができ、ただの一候補から第一志望校になつたのだ。ちなみに、なぜ公立なのかと言えば、兄貴が私立の大学に行つてしまつたからだ。学費が高いんだと。

顧問になる先生の雰囲気はいい感じだつたが、部そのものの雰囲気がわからない点で結構な賭けだつたと思う。

しかし、大当たりだつた、と入学して半年以上経過した今の俺は思つてゐる。

まあ、人数が少ないって点はどうしようもなくデメリットだ。二人負傷したら、その時点で試合ができなくなつてしまつというリスクがある。しかし、先輩がいない分みんなのびのびとプレイできるし、人数が少ないのでこそ部員の絆は他校の野球部より強固なものになつてゐる。少なくとも、俺はそう感じてゐる。そういうところが、結構気に入つてゐたりする。

「うー、さつみー！」

「言つなよ、余計寒くなる」

「口、コンビニ、寄る？」

「だな！ 肉まん食いてーー！」

「お、おれ、あんまん……」

「んじや、俺はピザまーん」

練習を終え、御端や真嶋と並んで自転車を押しながら歩く。自転車に乗つたほうが速いのは速いが、走るほど運動にはならない自転車で風を切つていくには、風が冷たすぎる。

吐き出される息はもう一週間ほど前から白くなつてきている。そういうのを見ていると、もうすぐ冬だなあ、としみじみ思う。

空を見上げても、正しく空は見えない。どんよりと重たそうな雲

が空を隠している。月の位置も、光のおかげでおぼろげにわかる程度だ。星なんてまつたく見えない。

エネルギーが足りないと嘆く体をコンビニに向け、三人それぞれ宣言じおりのものをささと購入し、コンビニの脇で早速それにかぶりつく。ほつかほつかの湯気を上空へと放つそれは想像以上に熱くて、三人して「あつちい！」と笑う。けれど、その熱もすぐ外気によつて冷めていき、食べやすい程度の温度へと変わつていつた。部活後の買い物、寒い日のピザまんは最高だな。や、肉まんもあんまんも好きだけどな。今日はピザまんだから。そんな気分だつたんだよ。

ほふほふとあつたかいそれを食つてたら、なんか胸がほかほかしてきた。何気ない瞬間だけど、こいつとき、なんか無性に「幸せだなー」と思う。以前、真嶋や御端にぽりつとそんなことをこぼしたら、馬鹿にされるかとも思つたけど一人は「俺もだ」と笑つて同意を返してきた。そのときも、「幸せだなー」つて思つた。

なんでもない日常つてのが、一番《幸せ》なのかもしけねーな。

「まだ七時かー」「つ、つまんない、ね」

真嶋が携帯電話で時間を確認してつまらなそうな声を上げ、御端も真嶋よりは控えめな声量でそれに乗る。その後に、俺も小さく「だな」と続けた。

なんつーか、力が余ってる感じだ。長いことそんな余裕は感じていなかつたもんだから、余計に違和感が強い。

我が北上里高校野球部の顧問である小林先生、通称コバセンは、野球のプレイ経験はない。

まったくの素人。だから、俺たちの練習メニューを組み上げるのは、水木監督の仕事だ。監督は女なんだけど、野球大好きで……いろいろとすこくってだな。北上里高校の卒業生で、コバセンの元教え子、かつて存在した旧野球部の部員でもあつたらしい。で、詳しくはわからぬが、コバセンと一緒になつて野球部復興を実行したわけだ。監督が組む練習メニューは、結構鬼だつた。朝練の開始は電車通学の部員が始発電車で学校にたどり着く頃に。放課後の練習は下手をすると解散が八時半を過ぎるという、恐ろしいスケジュールをこの夏に組んだのだ。中学時代じゃありえなかつたハードさ。さすがに毎日じゃなかつたけどな。毎週木曜日はミーティングのみで終わるようく設定されて、それは今も継続中だ。休息日、ということだ。そんな感じで、部活にとっぷり浸かっていた少し前までの生活を考えると、夜の七時、正確には七時十五分にこうしてコンビニの前に立つていることがたまらなく不思議に思える。そして、あのスバルタメニューに慣れてきていた身としては、少々物足りなさを感じてしまう。あんだけきつかつたのになー。最初の頃なんて、寝ないで家に帰るのがやつとだつたつてのに。人間は順応する生き物なん

だつてつづく思つ。

今日の解散は六時五十分ぐらいたつ。

秋季大会の地区予選準々決勝で惜しくも敗退という結果になり、その時点で今年の大会日程が終了している。その後は練習試合をいくつかこなし、徐々に体作りをメインに据えた練習メニューにシフトしていき、今じやすつかりシーズンオフ仕様だ。

けど、終了時刻がいつもまで早くなっているのは、そのせいだけじやない。

「アレや、結局どうなつたんだろうな。犯人とかわかつたんかな」

「昨日の今日でそこまで進展ある可能性はすっげー低いと思つぞ」

「それもそつか……」

真嶋の問いに対する俺の回答は、我ながらため息が出るよつな内容だつた。

真嶋が言う「アレ」つていうのは、昨日のトップニュースである獵奇殺人事件のことだ。もつとも、俺らがそのニュースを知つたのは今日の午前中だつたんだけど。

繰り返すが、それは昨日のトップニュースだつた。ローカルチャンネルのニュース番組も新聞も、この話題で持ちきりになつてゐる。……らしい。ニュース番組も新聞も滅多に見ない俺は、今朝の朝食の席でおふくろにその話を持ち出されて、「ふうん」と簡潔な……簡潔すぎる感想を抱いた。……もう感想ですらねーなこれ。

新聞もニュースも確認していなが、おふくろが言つには、最寄駅である北上里駅より西方向三駅ほど向こうの地域で、死体が発見されたらしい。それだけならよくある……なんて、あまり言いたくはないけど、あつちでもこつちでも報道されているような殺人事件とあまり変わらないだろ。もちろん小さな扱いはできないだろが、こう言つちゃなんだけど、自分に直接関係ないことなら冷めた目で見れるやつの多いこの時代、ただどつかの誰かが殺されたつて

だけなら、あつちでもこつちでも話題にのぼるようなことじやない。この事件がトップニュースと言つてしまえるほど取り沙汰されている理由は、発見された死体の状態だ。

とは言つても、その詳細な情報は、実は知らなかつたりする。なんせ朝飯を食つてゐる最中のことだつたもんと、おふくろはその辺りの情報を濁してゐたからな。

けど、学校じや誰も彼もが遠慮なくその話を繰り広げ、その内容は遠慮なく俺の耳にも入つてきた。まあ、どこまで信憑性を評価できるかはわからないけどな。頭がなかつただの、腕がなかつただのと、この辺りは証言がまちまちだつたが、クラスメートたちが口にした情報の中で上半身と下半身が別物になつてゐたという部分だけは一致してゐた。これがまた、刃物や機器で切断されたのではなく、力任せに引きちぎつたような状態だとか。

どんなどよ、と思つて想像しかけて、吐き気が胃の奥から這い上がりかけてきたので大人しく中断した。その傍らで神経がど図太い真嶋が「なんかすげーなー」なんて呟いてて、御端があんまり理解してない様子で首を傾げてゐた。この瞬間、一人のことが心底うらやましくなつたのは余談だ。

まあ、こいつらが余裕をもつて構えていられたのも、放課後の練習が開始するまでだつたけどな。コバセンと監督から、放課後の練習をしばらく早めに切り上げると宣言された途端、真嶋と御端は顔色を変えたのだ。

最寄り駅より三駅分離れているとはいへ、現場が市内だつてことに違ひはない。犯人の正体も目的もわかつてない状態で、遅くまで生徒を学校に拘束することは躊躇われたのだろう。他の運動部も人々に活動を切り上げてゐたから、学校側からお達しがあつた可能性も高い。妥当な決定だ。

……まあ、ギリギリ七時前解散で効果があるのかは、正直よくわからぬけどな。だつて、もう真つ暗だし。しかも部活後の寄り道は俺らにとつてデフォルトだし。

とにかくだ。この獵奇殺人事件がどつかのポイントで一段落してくれない限り、俺たちの練習時間は通常より短い状態の維持を余儀なくされる。だから、真嶋が解決したかどうかを気にかけるのは当然だし、俺だってとつとと解決してほしい。練習のことを差し引いても、獵奇殺人事件なんてのは、その響きだけで気味が悪い。

とはいえ、死体が発見されたのは昨日の昼前のこと。今朝の時点ではまだ被害者の身元も確認できていなかつたのだ。解決は遠いだろう。

自然にため息がこぼれる。だからと言って、ここで俺たちがこんな話をしていたところで、解決には結びつかない。気分を切り替えるために空を見上げるが、残念ながら星や月は見えない。余計に気が重くなつた気がしなくもないが、だからと言つてどうすることもできない。首の角度を元に戻して、真嶋と御端を見る。

「ま、俺らがぐだぐだ言つてたつてしょーがねーよ。練習時間が減るのは微妙だけど、相当ひどい状態だつたみてーだしな。しかも場所は市内。となれば、学校側が運動部の活動時間短くするのも当然の判断だろ」

「そーだけどやー……」

いまだ不満そうな真嶋の向こうで、あんまんを食い終わつたらしい御端が、すぐそこにあるごみ箱にあんまんを包んでいた紙を放り込み、それから西のほうを向いて、両手の指を組んで目を閉じた。

「御端？ なにしてんだ？」

「え、え、つと……おいのり……」

「あ、そつか。そだよな」

「……悪い御端、もーちょっと詳しく頼む」

納得顔して頷く真嶋にはちろりとだけ視線をやつて、御端に続き

を促す。

御端は全体的に言葉が足りない。足りない今まで完璧に理解できちまつのは、部内でもクラス内でも真嶋だけだ。なんで真嶋はわかるのか、一度部員一同で真剣に考えてみたことがあつたけど、結局のところ「真嶋だから」で片付いてしまつた。

「し、死んだ、ひとが……つき、生まれて、きて、幸せになれるよう」に、お祈りするんだ、つて……おばあちゃん、が

「……あ。なるほど」

つまり、御端は、先ほど俺と真嶋で話していた猟奇殺人事件の被害者の冥福と来世の幸福をお祈りしていたわけだ。ここまで言葉が出てくれば俺にもわかる。

真嶋がごみ箱に近づき、俺もそれに続く。

「俺もしょーつとー」

「俺も」

「い、いつしょ、にー」

「おお、一緒一緒

真嶋に続いてごみを捨ててから、ちょっと興奮気味の御端に頷いてやれば、御端はものすごく嬉しそうに笑つた。

御端は全体的に色素が薄い。特に髪の毛の色素が標準日本人より薄い。肌の色も俺たちよりずっと白いし、瞳の色もよく見れば茶に緑色が薄つすら混じつている。それが原因で、昔からあまり仲のいい友達ができなかつたらしい。中学時代には、運の悪いことに非常に意地の悪いやつと同じクラスになつたがために、イジメの標的になつたこともあつたとか。詳しく聞いたわけじゃないけど。だからか、誰かとなにかを一緒にすることを、とても大切にするところがある。俺や真嶋にとつては何気ないことでも、御端にとつて

はものす”——く大切なことだつたりする、らしい。

いい加減慣れればいいのに、と思わなくもない。けど、無理に慣れることはないんじやないかと思うんだ。何度も何度もこういうことを繰り返していけばそのうち、いうこととも当たり前なんだつて、そう思えるようになるだろ。急がせなくたつて、いつかその日は来る。だから俺らは、いつもどおりにしてればいい。

御端を急がせたつて、どつかで躡くのが目に見えるしな。

三人並んで、西の方向……被害者が発見されたという町のほうに向かつて、手を合わせてしつかり祈つた。

来世があるかなんてのはわかんね——けど。

もしそんなのがあるんだつたら、次こそはこんな悲惨な死に方じやなく、普通に、幸せに生きて、終われますよつ。

三人で祈った後も、寒い空の下だつて、いつのまつたく氣にせずくだらない話を繰り広げて、気がつくと八時を十五分ほど過ぎていた。

同じクラスで、同じ部活。一緒にいる時間は家族よりも長いはずなのに、いつたいなにをそんなに話すことがあるのかと自分でも思う。でも案外、くだらなくつて、記憶にもあまり残らないような、そういうどうでいい話で盛り上がりがれちまうもんだろう。実際俺は、つこさつきまで笑つて話していた内容の半分くらいは思い出せない状態だ。

真嶋、御端とは、つこさつきの十字路で分かれた。

俺だけ違う方向……つてわけじゃないんだな、実は。真嶋の自宅は学校の真裏だから、本当はコンビニに寄るより、裏門から出て自宅に直行したほうが速いんだよ。それでも真嶋は俺らと一緒に正門から出て、コンビニに寄つたりなんかする。それは真嶋なりの友達付き合い、というか、単に一緒にほつが楽しいと思っているからなんだろう。つまらないんなら、自由奔放を地でいくあの真嶋が、俺らと一緒に行動するとは思えないからな。特に御端とは妙に波長が合つているらしく、別行動するほうが珍しいくらいだ。

周りの連中は、同じクラスだから俺たち三人をワンセットと見なしてくることが多いんだけど、俺からしてみりや、本当のワンセットは真嶋と御端で、俺はプラスワンつて感じだ。たしかにあいつらと一緒にはいるけど、保護者のポジションだもんない、俺。あいつらが羽田はずしすぎないよう見てる役。……楽しそうだと思つたら俺も乗つちまつんだけどな。うん、大事にならなきやいいんだよ、ようするに。

……脱線した。

とにかく、俺は別方向に進む一人を見送つて、自転車に跨つた。

「」から自宅までは自転車で十五分程度。ずいぶん長話していたけど、それでも家に着くのは昨日より早くなる。ショーガないつてのはわかるんだけど、やっぱ違和感あるなあ。

ふいに、スラックスのポケットに突っ込んであつた携帯電話が振動した。それは数秒で途切れたので、電話ではなくメールの着信であることがわかる。

誰からだろうと思いながらコートの裾をどかして携帯電話を取り出し、二つ折りのそれをぱかっと片手で開く。

差出人はおふくろだつた。なんだろう、と本文を読む。

『できれば牛乳買つてきて』

その内容に、俺は無言でしばらく悩んでから、短い了承の返事を打ち込んだ。

正直に言えば、面倒くさい。コンビニに戻るには今来た道を戻らなければならないし、近所のスーパーに寄るにしても少し回り道になる。しかし、それでも昨日よりは少し早い時間には家にたどり着ける。一応、市内で獵奇殺人事件なんてものがあつたばかりだ。そんな中、おふくろに夜道を一人出歩かせるのはどうしたって気が引ける。

……息子の俺への心配は、どちらかと考へてしまつたが、気にしないことにする。いや、ほら、俺は自転車があるし。一応鍛えてる鍛えてるから、万が一獵奇殺人事件の犯人と出くわしても、相手が自動車とかに乗つていなければ逃げ切れる可能性がある。それに対して、おふくろは自分用の自転車なんて持つてないし、運転免許も持つていない。持つていたとしても、我が家に一台きりの自動車は父親が仕事先まで乗つていつてまだ帰つてきていないはずなので、どつちにしろ不在だろ？。

もうちょっとメールが早ければ、さつきのコンビニで買つたんだけどな。

俺はため息をついて送信ボタンを押し、一いつ折りにした携帯電話をスラックスのポケットではなくかばんの前面ポケットに放り込んだ。コートの裾をどけるという動作が邪魔くさかったからだ。あ、コートのポケットに入れてもよかつたのか。けど、あつたかいポケットの中に手を突っ込んだりしたら出したくなくなりそうだしな。やっぱかばんでいいや。

ポケットのファスナーを閉めてから、スーパーを目標して自転車を漕ぎ出した。頭の中でコンビニに戻つて改めて帰路につくパターンとスーパーに寄つて帰路につくパターンの所要時間をそれぞれ計算して、スーパーのほうが早いだろうと判断した。と言つても、五分も違わないんだけどな。

閉店時間にはまだ遠く、煌々と明かりを灯しているスーパーに足を踏み入れ、多くもないが少なくもない客の中にまぎれてさつさと牛乳パックを一本購入した。本数についてはメールになかったけど、まあ一本あればとりあえずいいだろ。

ビニール袋に入った牛乳パックとかばんを自転車のかごに放り込み、自転車にまたがつて改めて家を目指すことにする。

さて、と。今は何時だ？

携帯電話を引っ張り出して時間を確認すると、デジタル表示で一時三十八分という情報が表示される。ここからさらに自転車で十分ちょっと。

あぐいを一つしてから携帯電話をしまい、ペダルを踏む足に力を入れ、スーパーから離れる。

放課後の練習は短くなつたけれど、朝練は相変わらずあるのだ。早いとこメシ食つて風呂に入つて寝ないと、明日がきつくなるのは目に見えている。練習時間が短くなつて物足りない感はあるが、せつかくだから少しでも早く眠つて休もう、と前向きに考える。

少しでも時間を短縮しようと、足にさらに力を加えようと、した。

車輪が不安定によろけて横転しそうになり、咄嗟に左足を地面に

つけた。そのままの姿勢で、驚きから瞬きを数回繰り返す。

……今、揺れなかつたか？

無言であたりを窺う。揺れたような、気がする。けど、揺れらしきものを感じたのはほんの一瞬で、揺れたのだという確信がいまいち持てない。

……俺の気のせいいか？

視界に映るのは夜の住宅街。時刻は夜八時半過ぎ。等間隔に路上に配置された街灯が薄明るく周辺を照らし、民家の窓からぼのかな明かりが漏れている。夜特有の静けさの中、騒ぎ立てているような家は一つもない。

……やっぱ気のせいだつたかな。

練習時間がいつもより短いとはいえ、その短時間もやっぱしへかれてたわけだから、それなりに疲れてるし。気付かないうちにうとうとしちまつてたのかもしれない。あ、なんかそれあり得る気がしてきた。あっぶねー。こりゃマジでとつとと帰つて寝ないと、気がついたら道端に転がつてました、とかなつてしまいそうだ。そうなつたら笑えねーぞ。

気を取り直してもう一度自転車を漕ぎ出そうとした。

その瞬間、まるでこのタイミングを見計らつっていたかのように、再び地面が揺れたような気がした。

……寝てない。今は寝てないぞ、俺。

再び周辺に視線を巡らせて見ても、目に見える変化は一つとしてなかつた。

今のは、確かに揺れた。今度は間違いない。地面につけている足の裏から振動が伝わってきたのだ。

……いや、伝わってきてる。現在進行形で。断絶的に、けれど確実に連続して。

地震、か？

地面が揺れた、ということで真っ先にそう浮かんだが、しつくりこない。それにしては揺れ方が妙なのだ。最初の一揺れが錯覚じゃ

なかつたとして、あれが一番大きかつた。あれを本震だと仮定して、それについては違和感を訴えられるほどなにかを感じたわけじゃない。けど、今感じている連續性のある揺れを余震だと言う仮定は、どうにもしつくつこない。地震つつたら横揺れがメインだろ、普通。しかし、今俺が感じている振動は、俺の感覚が狂つているのでなければ、縦方向だ。

どしん……どしん……どしん……

……ちょっと待て。

なんか揺れと音がだんだんでかくなつてきてるような気がすんだけど。気のせい？ 俺の気のせいか？

しかも、揺れの感覚がほぼ一定だ。まるで巨大なにかが歩いているみたいな……。

どしん、どしん、どしん、

気のせい、なんかじや、ない。
どんどん、近づいてきている。

数十メートルほど先の街灯の光を、黒いなにかが遮つた。それがなんなのか、わからなかつた。俺は別に目が悪いわけじゃない。街灯がそれを照らしたのはほんの一瞬だったけど、たしかにその姿をとらえたんだ。けれど、わからなかつた。理解できなかつた。

つまり、それは理解の範疇を超えていた。

狼、のように、見えた。頭だけ見て、瞬間的に狼だと思った。犬という線も一瞬浮かんだけれど、街灯に照らし出された凶暴そうな顔つきが狼だと思わせた。けれど、すぐにそれはあり得ないと打ち消す。その頭部が、軽く民家の塀の高さを超えていたからだ。塀のてっぺんよりもむしろ街灯の照明部分とのほうが差が小さかつた気がする。……そんな狼がいてたまるか。

どしん、どしん、どしん、……

大体、狼の足音にしちゃおかしいだろ、これ。狼は四足歩行だ。しかし、この音の鳴り方はどう考へても一足歩行。さらにある程度の重量がなくちゃおかしい。

おかしいんだ。

どしん。

足音が止んだ。

俺の数メートル先で。

そこに立っている『なにか』を、見上げる。街灯の頼りない光が、それを照らしている。

……あるわけが、ないんだ。

人間の倍以上でかくて、一足歩行する狼なんて、いるわけない。

「……いつの間に寝ちゃったんだろうな、俺」

呟いた声は、自覚できるくらい不安定になっていた。

笑おうとして失敗した。

あるわけがない、これは夢だ。何度そう繰り返しても、目の前のは霧散しない。低い唸り声と反響するような息遣いを聞くほどに、現実味が地面から足を伝つて這いあがる。

それを認めたくない。目の前にあるものはあるはずがないものだ。こんなものが、こんなことが現実にあるはずがない。理性がそれを知っている。けれども、じゃあ目の前にあるものはなんなのだと脳裡で囁く声がする。だから夢なんだって、と理性が言い返す。

狼のようで狼ではありえない『なにか』が、腕(いや、前足か?)を振り上げる。

そうだ、夢だ。多分どこかで意識が夢の中に落ちてしまったんだ。
今頃俺の本体は道の隅かど真ん中にぶつ倒れてすやすや寝息をたて
ているに違いない。

獰猛な口が細く開く。その隙間から蒸氣のよつよつ溢れ出す白い息。
眼が細く歪む。ニタアと笑つていて見えた。

夢なんだ。……夢なんだろ？

だから、早く覚めてくれよ……！

動けずにはいる俺の目の前で振り上げられた大きく太い腕が、俺めがけて振り下ろされる

といふことは、なかつた。

『それ』がぐらりと斜め前へと傾いて、俺を避けるように倒れ伏した。……俺にぶつからなかつたのはただの偶然だらうけど。なんで突然倒れたのか、俺にはわからなかつた。でかい太鼓のように大きな音を打ち鳴らしている心臓の音を聞きながら、そろそろとぎこちない動きで緯線を動かす。視界の中に、『それ』から氷……というか、氷柱のようなものが突き出ているのが見えた。星も月もない夜の中、それは街灯の光を受けてきらきらとした輝きを溢していた。

……氷柱？ なんで？

たしかに、もうずいぶん外気は冷え込んできているけど。この地域は初雪もまだだ。氷柱なんてできるわけがないし、たとえ雪が降つていたとしても雪国でも雪山でもないこんな住宅街で氷柱を見ることはない。しかも、俺の腕より太くて長いものなんて。これじゃ氷柱なんて可愛いもんじやない、凶器だ。

こんなもの、いつたいどこから……。

考えようとするが、なにが起こったのかもいまいち理解できていない、突然降つて湧いたわけのわからない恐怖のせいでの少々麻痺を起こしている思考能力じや、たいした考えは浮かびようがない。

そうして立ち尽くしているうちに、キイ、と聞き慣れた金属質な音が耳に飛び込む。これは、自転車のブレーキの音だ。

視線を再び前方へと向ける。

そこにいたのは、一人の女だつた。

キヤスケットを深くかぶつていて顔はよくわからないが、キヤスケットに收まつていない横の髪が肩ぐらいまであって、男に

しては小さすぎて細つこくて、だから相手が女だとわかつた。厚手の上着、細めのジーンズに履き古したようなスニーカー。服装に特別不自然なところは見えなくて、女がまたがっている自転車も「ごく普通のものだつた。

普通だ。

その右手に、ゲームや漫画なんかに出てくる魔法を使うようなキャラクターが持つていそうな杖みたいなものを、握つていなければ、俺はしばし呆然と相手を見ていた。相手は相手で口をぱっかり開いたまま動かなかつた。

やがて、

1
·
0

「わー！？」

相手のほうが取り乱して大声を上げた。つられて俺も叫んだ。女は自転車にまたがつたまま俺を見て、声を震わせた。

「ちよ、な、ななな、なん、なんで！？」 なんでこじこじのー。

「ハニカム」

「**帰り！？**」
「**遅つ！** もうすぐ九時だよ！」
「**不健康だよ！**」
「**不良だ**」

「ちよ、なんでそこまで言われなきやなんねーんだ！？」
部活だ、
部活！ 不可抗力！ 不良じやねーつつの！」

反射的に答えてから、部活は七時前に終わっていたのだからこんな時間になってしまったのは俺（と、真嶋と御端）の勝手だということに気づいた。まあ、訂正するほどではないだろ？ から即座に忘れることにする。

それより、目の前の女のほうが重要課題だ。

女はキャスケットの下で驚愕の表情を浮かべ、次いで憎々しげに言い放つ。

「マジでか！？ もうすぐ十一月半分過ぎたよ！？ 大会も終わってるはずでしょ！？ もうシーズンオフなんでしょう！？ どんだけやる気！？ ちくしょーなんの野球部！」

「……ん？ あれ、俺野球部って言つたつけ？」

疑問が過ぎるが、それを振り払つように頭を軽く振つた。

それはとりあえずどうでもいい。とりあえず、そんな些細な引っかかりは後回しだ。

「なんでもいいけど、とにかく説明を要求するぞ！ お前は誰だ！ その杖みみたいなもんなんだ！ そして『これ』は一体なん、…」

…

視線を前方の女から、倒れている『なにか』に向けた。

そこにはなにもなかつた。

言葉が中途半端になり、俺は十秒ほど無言のまま『なにか』が倒れていたはずの場所を眺めた。目をこすつて再確認もしてみたが、そこにはやっぱりなにもない。

「……あれ？」

「いやいやいや、おかしいだろ。おかしいってば。あの黒い狼もどきはちゃんと音をたててそこに倒れたはずだ。俺はそれをしつかりこの目で見ていたのだ。それともなにか、俺はやっぱり夢を見ていたのか。

視線を前方の正体不明の女に向け直す。女は困り果てた様子で「あー」と呻き、左手で顔を覆つついて、右手にはファンタジーなフ

イクションに出できそうな杖が握られている。やつぱりある。

もしあつしきのが夢なのだとしたら、今のこの状態すら夢の中のはずだ。だつてあんな杖、ありえるのか？ 足腰が弱いひとが使うようなものとはまったく違うぞ。

「……いや、まあ、見られたもんはショーガないよね、うん」

女は勝手に納得し、自転車を道の端に置いて、歩いて俺に近づいてきた。俺のほうは自転車に乗ったまま、眼前に立った女に気圧されるように背筋をそらせた。女は俺の様子なんぞ気にした様子はなく、ただ俺の顔を見上げてきた。キャスケットが作る影のせいで、顔はやつぱりよく見えないが。

「怪我はない？」

「あ、ああ……」

「やつ、よかつた。私、怪我を治すことはできないから」

自転車に乗つたままというのが居心地悪くて、とりあえずのそのまま自転車から降りながら返事をする。

降りてみてはつきりわかつたが、その女の背は俺より低かつた。

……認めたくないけど、俺はあんまり背が高いほうじゃない。女はその俺より小さい。小さい、という第一印象は間違つていなかつたわけだ。百五十……はあっても百六十はないだろうか。まあ、男女で身長差がある程度存在するのは当たり前なんだけど……。

そんなことを考えている俺のすぐ傍で、女は安堵したよつに頷いて、続けた。

「傷がないなら問題ないね。暗示かけてあげる」

「……は？」

「巻き込まれたくないでしょ？」

キヤスケットの影から覗く一つの田^たが、まっすぐ俺を見上げた。俺の返事を待たずに、女は俺に向かってその手の杖を掲げる。いや、だから、それがなんなのか、アンタはどこに誰なのか、さつきの狼のようで狼じやないあれはなんだつたのか。

……聞きたいことは山ほどあるつてのに、女はなに一つ答える気はなさそうだ。問答無用、有無を言わせない、つてのは、いつにいつに使うのだろうか。

混乱する頭で考える。

暗示つて、つまりあれか。今見たことを忘れるとか、今見たものは夢だとか、そういうベタな方向か。そういうのつて効果あんのかな。実際に見たこともやったこともやられたこともないし、よくわからんねーな。

巻き込まれたくないだらうつてのは、どうこうことだらう。どういつ事態にかかっているのだらうか。とにかく、不穏な言葉には違いない。たしかにさつき俺の田の前で起きた出来事はおかしい。おかしいところがありすぎて、どうからシックロミ入れりやいいのかもわからない。このままだと、そのおかしいことに俺が組み込まれてしまうというのだろうか。……そんのはたしかにごめんだ。当然だろ？ 誰だつて自分の身が可愛いさ。

なのに……なんでだ？

女の言葉に肯定を返すことができない。頭の中でがんがんとなにかが音をたてている。思考が一つもまとまらない。

その中で、たつた一つ、浮かぶこと。

今、ここで、こいつの言つことに頷くぢやいけない気がする。その想いだけが、今俺を駆り立てようとする。

「ちょ、ちょっと待てつて！ お前、……」

「意見は聞きました。大丈夫大丈夫、怖いことなんてないからさ」

女を止めようと口元出した言葉を、途中で切つた。それは女に遮られたからじゃない。

女の向こう側の街灯が、闇に食い潰されるのを見たからだ。それがなんなのか、考えることはなかった。考える余裕なんてものはなかつたし、その必要もなかつた。

驚愕から目を大きく開き、短く息を吸い込み、唇が震えた。

「つ、後ろ！」

「えつ、！！」

俺の声に女が後ろを振り返ったときは、もう遅かった。

気がつくと俺は民家の塀に背中から衝突していた。コンクリートの壁は硬くて、叩きつけられた衝撃で肺が圧迫され、一瞬呼吸の方を忘れた。盛大に咳込んでからどうにか呼吸を取り戻すと、俺が立っていたはずの場所にはあの黒い獣がいて、そのでかい手に潰されそうになっている女がいた。

「ぐつ……ぐ、このつ、……馬鹿力つ……！」

女の体は地面に倒れていって、胸の上に杖を載せている。黒い獣の前足は、杖の数ミリ上で留まっているように見える。ただし、その太く鋭い爪は女の体に食い込み、傷つけている。特に右腕は、爪が完全に貫通しているように見えた。

ぐぐぐ、と黒い獣が腕に体重を乗せる。女は厳しい顔つきでそれに対抗する。『目に見えないなにか』が邪魔をしているみたいに、黒い獣は女を押し潰すまでには至っていない。

女が被っていたキャスケットは襲われた衝撃で飛んでしまったらしく、隠されていた顔が見えるようになっていた。その顔に見覚えはないが、年齢は俺とあまり変わらないよう見える。

女が瞳だけを動かして俺を見た。

「つ……なにしてんの！」

「え……」

「逃げて！」

それは、これ以上ないほど、正しい指示だった。

女を襲っている黒い獣は、さつき俺を襲おうとしたやつと同種のものに見える。人間の倍以上でかさがある体に、狼みたいな顔。

よく見たらその輪郭はまるで燃え盛る火のようにならめいていた。

現状を考え、あの女はおそらく俺には理解できない不思議な力が使えるのだろう。そうとしか考えられない。だから今、潰されずになんとか持ちこたえていられるのだ。

そこに、特別な力なんてなんにもない、ただの高校生が入り込んだら？

答えは簡単。やられておしまいだ。

だから、《逃げる》って言う女の指示は正しい。なにも間違つちやいない。死にたくなければ逃げるしかないんだ。あの黒い獣は意識をあの女にだけ向けているから、今ならきっと、逃げ切れる。

「つ……」

ぎり、と奥歯が鳴った。

ずるりと手のひらが地面を滑り、その指先が硬く冷たいものに触れた。自転車だ。少々形が歪んで崩れているが、俺の自転車がそこに倒れていた。黒い獣が飛びついてきた衝撃で吹っ飛んだせいだろう。

動こうとして、体が震えていることに気づいた。手も、足も、体全部が情けないくらい震えている。歯も上下でぶつかり合って、かちかちと小さく音を立てている。武者震い、だつたらかつこよかつたのかもしれないが、これは単純な恐怖によるものだ。危険が目の前に迫っている。それを理解した理性が本能と一緒にになって恐怖を訴えているのだ。

恐怖の源に目を向ける。でかい団体の、闇そのもののよつな獣。鋭い牙を並べた口を開き、そこからあふれる呼気は白く染まり、こぼれた唾液が女の顔を汚した。

女の顔が歪んだ。そこにあるのが嫌悪か苦痛かは、俺にはわからない。

アスファルトの上にざぶりとした水溜りのようなものが広がって

いく。

……血だ。

そりや、女は怪我を負っているんだから、血が出るのは当然だ。しかも、あんな太い爪が右腕を貫通して、地面に縫い付けられる形になつてゐるんだ。流れる血の量も半端じやないだろ？ 想像もできないが、相当痛いはずだ。

それは、俺をかばつた結果だ。他人をかばつて自分が大怪我する。そんなん、馬鹿のすることだろ。

女は俺に「逃げろ」と言つた。それは《正しい》。

……けど、《正しいこと》が《最善》だつて、誰が決めたんだ…？

目を閉じて、息を大きく吸い込んで、ぐつと恐怖ごと飲み込んだ。一瞬、体の震えが止まつた。俺は素早く立ち上がり、飛びつくように自転車を掴み、背中と左ひじから感じるちつとした痛みを無視して、その自転車を持ちあげた。

「ぐ、おんのぉ…！」

精一杯の力で投げつけると、自転車は黒い獣の肩にぶつかつた。獣の視線が俺に向く。意識が俺に向かつ。『じくん、と急激な緊張から口内の唾液を飲み込んだ。

女は生じた一瞬の隙を見逃さなかつた。

「つ、『ザキ・クレスタ』！」

その声に呼応するよつに鋭い氷の刃がどこからか現れ、黒い獣の体を飾るよつに突き刺さつた。黒い獣が驚いたように悲鳴を上げて体を引いて数歩分退き、必然的にその鋭い爪から女を解放することになつた。その隙に女は這いするよつに獣の下から抜けだそうとする。が、怪我のせいかその動きは決して素早いとは言えない。見て

いられなくて、傍に駆け寄つて半ば引きずるみたいに獣の下から助け出した。そのまま、黒い獣と距離を取る。

女が歪んだ顔で、俺の顔を見上げてきた。

「つ、……馬鹿じゃないの……逃げてつて言つたじゃん……」

「つ、せーよ……怪我してる女一人残してなんていけるかつつの」

「……馬鹿だ」

「馬鹿で結構だ！　んなことよつお前、大丈夫か……？」

聞いてはみたけど、「大丈夫か」なんて聞く意味はないような気がした。獣の爪から解放された右腕からは今もだらだらと血が流れ出でいて、見ているとこっちまで痛いような気がしてくる。左肩も爪の餌食になつていて、服が裂け赤く染まつていて。上着を引きちぎつて止血とかしてみるか、でもやり方詳しくは知らない一しな、とか考えていると、女が再び口を開いた。

「……今からでも遅くないから、逃げて「
「できるか！」

女はなおも「逃げる」と言つ。少しだけ体に震えが戻ってきたが、俺の口は俺の気持ちのまま動いた。

女は俺の問いかけに一切答えない。答える気がない。自分の言いたいこと言つただけで、俺の言葉なんて聞きやしない。

なら、俺だつて聞いてやらない。やりたいようにやつてやる。

「田の前で俺かばつて怪我したやつがいるつての、それを放つて
いけるわけねーだろ！」

「……馬鹿だ」

女の顔が、くしゃりと泣きそつに歪んだ。言つてることは可愛く

ねーけど……なんか、その顔見たらい……「絶対助けてやんねーと」つて、余計に強く思った。

とにかく、ここにいたつて事態は好転しない。まずはあの黒い獣から離れねーと。

女の腕を肩に回し、立ち上がろうとする。俺の次の行動を察して、女が力なく言つ。

「無駄だよ……人間の足じや、すぐあいつに追いつかれる」

「……戦つて倒すしかねーってか……」

たしかに、あの巨体だ。一步のでかさも半端じやないだろつ。走つたところで一瞬で追いつかれる可能性が高い。自転車ならまだ逃げ切れる可能性があるかもしれないが、あいにく俺の自転車はヤツに投げつけちまつたし、女が乗つっていた自転車は、まだ無事ではあるが、それを手に入れようとヤツの横を通り抜けなきやならない。

黒い獣がこっちを見た。動物の感情なんて生まれてこのかた理解できたためしがないし、普通わかるはずもないのに、とてつもなく怒つているように見えた。腕に刺さつていた氷の刃がずぶずぶとヤツの体内に飲み込まれていく。

……一刻の猶予もねーってか。

「……どうすりやいー」

「へ……？」

「弱点とか、なんかねーのか、アレ」

「……え、まあ、ある、けど」

「はやく教える」

女の体を放し、その右手から杖を奪い取る。それ以外に武器にできそうなものが、手近にない。

俺は立ちあがって、女をかばうよう前に出る。震える足は、左の拳を叩きつけて強制的に抑え込んだ。

「ちよ、……」

「……あんま動くな。痛いだろ、それ」

「……」

押し黙つたのは、図星だから、か。

すん、と黒い獣がこっちに向かつて一步踏み出してきた。俺は杖を剣に見立てて握り、その先端を獣に向けた。剣なんて、中学の体育の授業で剣道やつたくらいだけ、まあ経験がまったくのゼロよりかはマシだろ。

「で、弱点は？」

「……頭、か……胸の、真ん中。そここ一一定以上のダメージを『えられたら、勝てる』

回答を聞き、改めて黒い獣を見た。

……胸でも俺の頭より高い位置にありそなんんですけど。届くかな……。しかも一定以上の一定つて、どのくらいを指すんだ。

でも、やるしかねえ。やるしかねーんだ。

ぐつと杖を握る右手に力が籠つた。手が震えている。……武者震い、これは武者震いだ。そうだろ、俺。

「……井澄くん」

「なんだ！？」

うわ、声裏返つた！ マジカッ「悪い！」

俺の情けない反応に気づいていないのか、気にしていいのか、女は続けた。

「……武器なら、他にもある、けど……」

「へー?」

予想外の言葉に、思わず背後を振り返る。女は気まずそうに俺から顔を逸らしていた。

「……ごめん、今のは。それを渡したら、君を完全に巻き込むことになっちゃうから。……それ、返して。やっぱり私がやるよ。だから君は早く逃げて」

「……」

女が再び俺を見て、俺に左手を差し出してきた。杖を渡せ、といふことだ。

俺は首を動かして、眼前の黒い獣を見た。隙だらけなはずの俺に飛び掛つてこないことが気味悪い。その見た目からして気味悪いのに、その姿がどうやって俺たちをいたぶろうかと考えているようにも思えて、余計気味が悪い。

俺は大きく息を吸い込んで、冷たい空気で肺をいっぱいにして、盛大に吐き出した。

肩越しに、女を見て、答える。

「わかった。……巻き込んでくれ!」

女は呆然とした表情を俺に向けた。俺の答えが相当意外だつたんだろう。

そりや、こんなわけのわからないことに巻き込まれるなんてごめんだ。その気持ちは否定しない。今この場を逃げだせば、逃げ切れれば、そうして夢つてことにしてしまえば、このふざけた出来事に関わらなくてすむのかもしない。その時は、それでいいかもしけ

ない。けど、あとで絶対考えるんだ。あれは本当に夢だったのか、あの時の女はあれからどうしたのか、どうなったのか……。考えるつむじにさきつと、俺をかばつて怪我をした女を見捨てて逃げ出した自分を、許せなくなる。

巻き込まれるのも嫌だけど、そんな気持ちの悪い、出口のなさそうな後悔に纏わりつかれるのはもとじめんだ。

「……馬鹿」

「お前、それ何回目、……！？」

俺が言い返そうとするが、女は傷を負つていては思えない素早さで立ち上がり、俺の体に体当たりをかましてきた。俺は再び道の端に投げ出されたが、今度はどうにか堀への激突は避けた。

なにかが潰れるような、嫌な音がした。

顔を上げると、さつきまで俺が立っていた場所には黒い獣がいて、その大きな手が女の右足を捉えていた。血が流れる様子はないけど、女の顔が辛そうにゆがんでいる。

「つ、おーーー？」

また、かばわれた。

前方にあいつがいるつて、いつ襲つてくるかわからんねーつて、ちゃんとわかつてたはずなのに。ちゃんと意識してたはずなのに。また、助けられた。

自分の情けなさに泣きたくなつてくる。

泣いてる場合じやないのは重々承知してる。でも、この感情をコントロールする方法がわからない。知つているなら、頼むから誰か教えてくれ。

涙ぐみ始めた目を女と獣から逸らせずにいると、ぐつと女が左腕を動かした。その手にはいつの間にか、俺の手から奪い返されてい

た杖。杖の頭が、俺に向けられる。

鋭く瞬く女の瞳が、俺をまっすぐじらうていた。

「……”眠る魂よ”」

「つー？」

女の声が不思議に反響すると同時に、じくん、と心臓が大きく鳴つた。体中に血が巡る感覚が湧き上がってくる。

“忘れぬ誓い、置き去りの約束、その強き願いを具現せん”

頭から足の先まで熱が充満していくような気がする。心臓の音が頭の中にまで響く。その奥で、なにかがなにかを囁いているような気がしたけれど、心臓の音がうるさくて、ちつとも聞き取れない。なんだ……なんて、言つてゐんだ、なあ。

「……起きる、《ナイト》！」

どん、と大きな音がした。

体の奥が鳴いた。

強い光に包まれて、自分の指先さえ見えなくなつた。けれど恐怖は微塵もない。その光は熱くもなく、もちろん冷たいわけもなく、ただ俺を導く。

光が消える頃、俺の手には一振りの剣が握られていた。剣道で使う竹刀とか、木刀なんでもない。西洋の中世で使われていたような、あるいはファンタジーフィクションに出てくるような、剣。そんなもの、初めて握るはずなのに、まるでずっと以前から扱つていたように俺の手に馴染んでいる。

軽く地面を蹴つてみた。体が浮くように跳ねる。なんだろう、体がめちゃくちや軽い。

前方の黒い獣を見る。その片手はいまだに女の足をおさえているが、顔は完全にこっちを向いている。

あんなに恐怖心を搔き立てるような、見るからに凶暴そうな姿をしているのに、今は欠片ほどの恐怖とは思えない。なぜだらう。確信できた。

俺は、一いつに勝てる。

剣の存在を確かめるように、手の力をいつたん緩め、再度握り直す。

そして、黒い獣に向かって、思い切り地面を蹴った。

傷を負つた少女は、その光景をただじっと眺めていた。より正確に言えば、目が離せなかつた。

少女に压し掛かっていた『敵』は少女の脇に音を伴つて倒れ、徐々にその存在を黒い煙へと変化させていき、やがて完全に存在しないものとなつた。その光景を見届ける度に湧き上がる感傷をやり過ごし、一つ息を吐き出した。

地面に倒れている少年へと視線を移動させた。

一刀両断。

少年が見せたものは、そう表現するにふさわしい光景だつた。

少年は軽く地面を蹴り、『敵』の頭上へ飛び上がり、振り上げた剣を振り下ろした。そこに込められていたのは、無意識ゆえの全力。その一連の行動こそが、少年の内に秘められてきた『力』だ。

剣の出現は予想の範囲内だつたが、少年が見せた異常なほどの跳躍力には思わず目を剥いてしまつた。しかし、よくよく冷静になつてみれば、それは意外でもなんでもなかつたのだ。

「……そりや、そうか。私の中に『風』の力は、ほとんどないもん、ね」

少女は意識のない少年の顔を見ながら、小さな声でたしかめるようになつた。

少女は『魔術』なるものを操ることができる。本来ならばそれは、少女が死んでも表に出でることはなかつたはずの『力』だが、少女の内に眠つていたそれが呼び覚まされて以降は、むしろ少女の一部として馴染んでいる。

魔術には基本属性とされる属性が四つ定められている。少女はその四つの属性の魔術をすべて扱えるはずだ。……本来なら。現実と

して、少女がまともに扱えるのは四つのうち二つ、つまり一つの属性に関してはほとんど魔術が使えない。そのたった一つが、『風』属性だ。

まったく使えないわけではなく、風を起こす程度のことは可能だ。しかし、少女が起こした風でできることは、物体を遮ることと物体を動かすことで、攻撃性は皆無と言つていい。

その『風』はどこに行つたのか。

少女は今更のように、その答えを実感した。

少年は眠つている。疲れているのだろう。ハードな部活動の後の出来事だ。この『力』は、解放している間は平常時より体が軽いし、怪我をした際の痛みも薄い。大抵のことでは疲労を感じることもないし、傷の治りも速い。けれど、通常状態に戻つた途端、どつと疲れが押し寄せてくる。少年が眠つてしまつのも無理はなかつた。

少女は静かに意識を研ぎ澄ませた。少女が張つたアンテナに、新たに『敵』の気配は一つも引っかかるない。今しがた、目の前で眠る少年が両断したもので今日は最後らしい。随分と都合のいいふと、不快な想像が浮かぶ。

自分は遊ばれていのではないか、と。

『敵』の考えの、根本的な部分は読み取れる。しかし、細部に関しては少女にはさっぱり理解不能だ。直接顔を合わせたことも言葉を交わしたこともないのだからそれも仕方がないのだろうが、今日ばかりは『敵』の不気味さが気にかかる。

この怪我では、立ち上つて普通に歩くくらいまでは今晚中になんとか回復できるかもしないが、戦闘となると相当厳しい。それを理解しているように、一切の干渉を断つた敵。良心的だ、などとは思はない。

そんな状態のお前を攻撃してもつまらない。

そう、笑われていのよつた気がしてきて、ものすごく不快だ。

そうである確証がなければ、そうでない確証もない。そうは思つても、腹の底が煮えるよつた感覚を消し去ることができない。

しばしの間、両手と閉ざして静かな呼吸だけを繰り返す。徐々に体内の熱が平常に戻つていくのを自覚し、少女は開いた目を改めて少年へと移した。

考え方を変える。たとえ遊ばれているのとしても、今の状態においては間違いなくありがたいことだ。今襲いかかられて困るのは他でもない自分なのだ。負傷した身で他者を気遣いながら戦う余裕はない。

今は甘んじるしかない。しかし、いつか絶対その足元を掬つてやる、とまみえたことのない『敵』に向けて反撃を誓つ。

少女は気持ちを切り替え、立ちあがろうと試みた。しかし、右足がぴくりとも動いてくれない。「あれ?」と思い、次いでぎくすきと神経に訴えかける痛みを自覚し、足の方に手を向けてみる。血が出ている様子はないが、集中しなくとも芯に響くような痛みを感じ取れる。とつさに『風』でガードしたことで、潰されるという最悪の事態は回避できたが、与えられた衝撃を完全に無効化することはできず、骨に影響を与えてしまったようだ。あの瞬間は他のことに集中していたのであまり気にしていなかつたが、そういうえば「みしつ」という嫌な音がしていた気がする。ビビくらいは覚悟しなければならないだろう。こうして『力』を解放したままもう数分じつとしていれば、なんとか動かせるくらいにはなるだろうが……。

肩と腕の傷も、血はすでにほとんど止まっているが、今晩中に痛みが消えるまでの回復は難しいだろう。通常状態に戻つた後のことには、想像するのも嫌なので考えないことにした。

現時点で立ち上がることを断念した少女は、どうにか這いすつて少年の傍に寄つた。健やかに寝息をたててている少年を遠慮なく観察する。見たところ、手をすりむいている以外は、目立つところに傷はない。しかし、服の下はわからない。背中を塀にぶつけたりしていたようだから、すりむいてはいなくても打ち身にはなつているかもしれない。

なんにしろ、少女は傷を癒す手段を持つていない。

「……なんで、やつちやつたかなあ……」

少女は、後悔していた。

巻き込んでしまった。本人が「かまわない」と言ったとはいっても、やはりしてはいけないことだったという気がした。

たしかに、少女の体は限界が近かつた。右腕と左肩の負傷、さらには右足骨折の可能性。本来なら氣絶したとしてもおかしくない状態だ。更に、『敵』を倒した後の後始末という仕事が、少女には残されていた。それを考えれば、余力を残しておく必要はあった。少年を巻き込んだのは、そういう意味では非常に合理的だ。けれど、無理を押しても、巻き込むべきではなかつたのではないだろうか。いや、巻き込むべきではなかつたのだ。

なにより、巻き込みたくはなかつた。それは、少女が一年もの間、ずっと胸に抱き続けた願いだつたはずだ。

何故、こうなつてしまつたのだろう。何故よりもつて、襲撃が今、このときだつたのだろう。あと数分でも違えば、いづはならなかつただろうに。

いるかもわからない運命を操る神様に罵倒を浴びせたくなる。いつたい、どこまで抱いた願いを切り裂くつもりなのだろうか。自分の願いはそんなに難しいことなのかと、世界の理不尽さにやり場のない憤りが降り積もる。

恨み言を胸の内で呟きながら、しかし、少年に重なつた『彼』の姿に涙がこぼれそつになつたことは誤魔化しようがない事実だつた。切なくて。懐かしくて。……嬉しくて。そう感じてしまつた自分に眉を寄せながら、それでも湧き上がつてきた感情を振り払うことはできなかつた。

ぐつと目を閉じ、気持ちを落ち着かせてから再び目を開ける。

少年は眠つてゐる。なにも知らない、安らかな顔だ。その顔だけ見ていると、本来の年齢より幼く見えるのが不思議だ。

今、少年は《夢》を見ているのだろう。

少年が見ているだろう《夢》を想像して、悲しくなった。それは少年が知らないといふことのはずだった。知らないまま、生きていけるはずだった。けれど、《彼》は《起きた》。そうなった以上、少年は《夢》を見る。きっと、あたたくて、けれど、とても悲しい《夢》を。

その《夢》の最後に、少年はなにを思つだらう。

「……後始末、しなくちゃ」

どれだけ悔んだといひで、過去は変わらない。足を止めて振り返ることに意味がないことを、少女はとつぐに痛感していた。さしあたつて、少女が今しなければならないことは、この場を何事もなかつたかのように取り繕い、少年を家へと送り届けることだ。

視界はぼやけていた。どこか異国風の街並みだといつことだけ認識できたけれど、それ以上の細かいことは一切わからない。

俺の目の前には、ひとりの女の子がいた。

その女の子は寂しそうに笑っていた。ぼやけていて、顔はよく見えないので、それでもどうしてだか、年に似合わない大人びた笑い方だと思った。

笑つてほしいと思った。

そんな寂しい笑顔じゃなくて、もっと心からの、幸せで幸せでどうしようもなくてこぼれるような、そんな笑顔を見せてほしいと思った。

小さな手、小さな体、寂しい笑顔。

ただひたすらにその身を守ってくれる誰かがほしいと言つのなら、俺がなつてみせよう。俺が、君を守つてみせる。

だから君は、どうか笑つていて。

* * *

気がつくと、自分の部屋のベッドの上に寝転がっていた。目覚めた直後は、仰向けの状態で、はつきりしない頭で、しばらくぼんやりとしていた。

ようやくまともに思考が動き始め、まず考えたのは、「なんで俺は自分の部屋で寝ているんだろう」ということだった。本来なら疑問に思うこと自体おかしいことなんだろうが……。昨晩、無事に帰宅したという記憶がどうにもすっぽり抜け落ちていて。というか、まったくない。

次に、「あれは夢だったのだろうか」と考えた。寝て、目覚めてみれば、あんなにリアルに感じていた出来事もどこか遠い世界のことのように思えた。

もぞもぞ動いてうつぶせになり、枕元の目覚まし時計に目を向ける。いつもより二十分ほど早い朝だ。まだ寝ていたいとも思うが、一度寝なんてしたら遅刻確定。監督に怒られる。……それは嫌だ。監督に頭ぐりぐりされるとすっげー痛んだよ。

高校生になつて、初めて覚えた「休みたい」という気持ちにフタをするように、のそりと体を起こす。

重い。だるい。マジで休みたい。でも練習を休むのは嫌だ。

……大概、野球馬鹿だな、俺も。

苦笑して、気分を切り替えるために精一杯伸びをした。残念ながら全然すつきりしなかつたが。

「……シャワーでも浴びるか」

少しくらいすつきりするかもしない。……昨日の晩、風呂入った記憶ねーしな。

ベッドを降りてから、ベッド脇にスニーカーが揃えてあることに気づいた。五秒くらいそれをじっと眺めてから、軽く息を吐き出してそれを拾い上げ、部屋を出る。

ギシギシと階段を踏み鳴らし、一階へと降りる。リビング・ダイニングにはすでに明かりが灯っている。おふくろはもう起きているんだろう。なるべく気付かれないように気を遣いながら、玄関に向かつた。部屋から持ってきたスニーカーを玄関にそつと置き、それから風呂へ向かう。

洗面所に入つて鏡に映る自分の姿を見て、今更ながら制服を着ていることに気づく。……制服を着たまま寝ていたわけだ。上着は結構頑丈な生地だから問題ないけど、その下のシャツはちょっとしわしわしてる。……ま、いつか。普段からピシッと整えてるわけじゃ

ねーし。

それを脱いだとして、両手に残っている擦り傷に気が付く。

「…………」

観察してみると、赤黒いかさぶたができるとして、血はしつかり止まっている。屋外で負った傷ならもつと汚れていそうなものだが、不思議なほど、ちゃんと水で洗つたみたいに綺麗な状態だ。制服を脱いで、それを一通り検めてみるが、多少皺になつていて以外に変わったところはない。不思議なくらい、汚れていない。後頭部を軽く搔いたが、それでなにが浮かぶわけもない。

脱いだものを適当に畳んで置いておき、風呂場に踏み入る。十一月後半に突入しているこの時期、冷えきつたタイルを踏みながらシャワーへッドからお湯を引き出す。水のほうが頭の中がはつきりしつきりするような気もするけど、この季節になれば水はものすごく冷たくなる。軟な体をしているつもりはないけど、うつかり風邪をひくのはいただけない。

「…………」

背中にお湯が染みた。でも、耐えきれないほどじゃない。いくらかびりびりする程度だ。多分、両手みたいに多少擦り傷ができるんだろう。色も、青くなったり黒くなったりしているかもしれない。わざわざ無理して背中を確認するつもりもないが。

それなりにさっぱりして、脱いだ制服を再び着込む。多少汗のにおいがするが、夏に比べれば断然マシだ。

リビングに入ると、台所に立つておふくろの姿が視界に入つた。おふくろは俺に気付いて、手を止めて顔を見せてくる。

「おはよ、孝弘」

「おはよう」

朝の挨拶だけして、また作業に戻る。律儀な母親だ。

「なあ、おふくろ」

「んー？」

「俺、昨日何時頃帰つてきた？」

「ええ？ ちゃんと時計見てたわけじゃないけど……でも九時過ぎには帰つてきてたと思つわよ」

「牛乳、買つたと思つんだけど、ちゃんと渡した？」

「もひつたわよ。ちよつとパックが潰れてたけど。あ、後でお金渡すから」

「……晩飯食つたつけ」

「食べてないわよ。すぐ寝ちゃつたじゃない。お風呂も入らないで

「へえ……」

「なに？ 寝ぼけてるの？」

「んー……」

覚えがねーんだよ。……とは、たすがに言へないか。

重ねまくつた質問に返つてきた答えからすると、おふくろの中では俺がちゃんと玄関から帰つてきて牛乳も渡して皿屋に入つたことになつているらしい。自分の記憶とおふくろの記憶の食い違いに小さくため息をついた。

とりあえず、腹減つたな。

「晩飯残つてんの？」

「残つてるわよ。食べる？」

「食う」

「じゃあ温めなくちゃね」

「そんぐらい自分でやるよ。冷蔵庫？」

「ええ」

飯をあつためてる間に、一応手のひらの傷に黄色い消毒液をかけ、絆創膏をぺたぺたと貼つた。そのままにしてのんびりのんびり気になるし、擦れると痛そうだし、と思つての行動だったけど、すぐに後悔した。手のひらって、絆創膏が定着しにくいんだな……。すぐはがれそう。余計気になるな、こりや。でも、もう貼つちまつたし、とりあえず完全にはがれるまでは放つておくことにする。

昨日食わなかつた晩飯を朝飯として平らげ、おふくろが用意してくれた弁当をかばんに詰め込み、いつも通りの時間に家を出た。

自転車はガレージの前に置かれていた。いつもならガレージの中に収めるんだけどな。

ざつと点検してみたところ、壊れているとこにはなさそうだった。何事もなかつたかのように、元のままだ。

五秒くらい考えてみたが、考えたところで答えが転がつてくるわけもない。あきらめて自転車に乗り、学校に向かってペダルを踏んだ。

通い慣れた道の途中で、少しだけ足を止めて、ざつと周囲を見回した。

いつも通りだ。おかしなところはなにもない。もつとも、普段からそんなに気をつけて周囲を見ているわけじゃないから、ちょっとした変化じや気付かないだらうけど。とりあえず、違和感を覚えるほどの変化は存在しなかつた。

周囲に誰もいないことをいいことに遠慮なくぐでかいため息をつき、再びペダルを漕いだ。

学校に到着し、自転車置き場に自転車を置きに行く。そこには先客　御端がいて、ちゅうぶん自転車のロックをしていた。

「はよ、御端！」

「お、おはよ、井澄くん！」

声をかけると、御端はこいつを見てぴとと背筋を伸ばした。

御端の自転車の隣が空いていたので、そこに俺の自転車を停め、ロックをする。その間に御端のほうはロックし終わっていたが、律儀に俺が作業を終えるのを待っていた。先に部室行けばいいのに、と思いながら、御端から寄せられる好意の空気がくすぐつたくて、嫌ではなかつた。

なにせ御端は、当初はひどい対人恐怖症だつたのだ。原因は中学時代のイジメだろうが、ひとに嫌われることを極端に恐れて、返す言葉は途切れ途切れで（あ、これは今もそんなに変わらないか）、おまけに目が合わない。そんな御端が、こうして誰かを待つて一緒に部活へ行こうとするつていうことは、なかなかの成長だと思つ。人間、懐かれて嫌な気分になるやつはあんまいないだろう。

「あれ……井澄くん、怪我……？」

見ると、御端の視線は俺の両手に固定されていた。手のひらの傷自体は大して見えていないが、絆創膏の端が横にはみ出している。

「ん？ ああ。ちょっとな……昨日の帰り、自転車ですっ転んでさ」「ええ！？ だ、大丈夫！？」
「へーきへーき。こんくらいなんともねーつて」

なんでお前のほつが痛くて泣きそうな顔してんだよ。

御端の顔があんまりにも情けなくて、だから俺はなおさら笑顔で絆創膏だらけの手を振つて見せた。

「ほ、ほんとに？ ほんとにへーき……？」

「おひ。御端、手出してみ？」

「う、うん……？」

不思議そうに、だけど素直に両手を差し出してきた御端。俺はなに食わぬ顔でそのタコだらけの手に両手を伸ばし、ぎゅう、と力いっぱい握りしめてやつた。「いー?」と御端が痛そうに声を上げ、俺は成功した悪戯に笑つた。

「い、痛いよ、井澄くんつ……」

「ははつ、悪い悪い! でもほら、御端が痛がるくらいには平氣で物握れるし!」

「う、うん。よかつた!」

一転して、御端は笑顔。俺の怪我が大したことないってわかつて安心したらしく。

……ま、ちょっととびりびりすっけどな。部活は体作りのメニューがメインだから、支障出るほどのもんでもないだろ。

「うつし。行くか

「うん!」

自転車を口ックし終えたので、御端と一緒に部室を手招す。途中、ふと氣になつて、聞いてみた。

「なあ、御端。昨日の帰りも、俺と別れてから、変な音聞いたりしなかつたか?」

「へ、へん、な?」

「ずしんつーか、どしんつーか……ええと、すっげー重たいなにかが歩くみたいなぞ」

「う、んと……なかつたと、思ひ、けど……?」

少し自信なさげに、ふるふると首を振る御端。

……ま、あれは御端と分かれただいぶ後だしな。

「だよな。悪い、なんでもねえ。気にしないで」

「う、うん……？」

不思議そうな御端にそれ以上のフォローはしないで、俺たちは部室に入った。部室の中には真嶋や仲町もいて、一応真嶋にも御端に聞いたこととまったく同じことを聞いてみたけれど、返事は御端と大差なかつた。仲町には聞かなかつた。こいつは俺らとは家の方向がまったくの逆だから、聞く意味がない。

しつこく「なんで？　なんで？」と食い下がる真嶋と仲町に「うつせえなんでもねえつづつてんだろ！」と返して、俺たちはグラウンドに駆け込んだ。体のあつちこつちが鈍い痛みを訴えてきたけど、無視できるレベルだ。

……残つたのは体の傷と痛みだけ、か。

一週間つてのが案外あつさり過ぎていいものだといひことは知っていた。そして今、改めてそれを実感している。

この一週間、一日一日のサイクルに大きな変化はなかつた。俺の一日といえば、朝起きて、飯食つて、学校行つて、朝練して、授業受けて、飯食つて、ちょっと寝て、授業受けて、部活して、コンビニ寄つて買い食いして、他愛ない話をしながらみんなで自転車を押して歩いて帰る。十日も挟んだから授業なしで一日部活に励んだ日も一日あるけど、それも以前となんら変わらない。

そんなふうに、一週間が経過した。

その間、あの日の女は一度も姿を見せていない。両手の傷は薄くなつちまつてもうわからないくらいだけど、背中はまだ鈍く痛む。まだ、消えていない。

今日まで何度も考えた。あれは本当に現実だつたんだろうか。それともやっぱり夢だつたんだろうか。けれど、上手く答えは出ない。どつちかつていうと現実の線が濃厚だけどな。傷だけとはい、証拠が残つてたわけだし。

ぬつと、唐突に視界いっぱいに御端の顔が入り込んだ。俺はパツクジユースのストローを口に含んだまま「くんと喉を鳴らしながら、目を丸くした。

お、おおお、びっくりした。そういうや今昼休みだつたんだつけ。

「なんだ？ 御端」

なんとか平静を裝つて、首を曲げて俺の顔を、困ったような、困惑したような顔をして覗き込んできている御端に声をかけてみる。

「え、と……どうかしたのかな……って」

「ん？ なんでだ？」

「なんか、元気、なく、みえる……」

自信なさそうに告げる御端に、俺は内心苦笑した。御端に心配かけるとか、なにせってんだ俺。

御端はちょっと（いや、だいぶ……？）天然入ってるけど、負の感情についてはなかなか敏感だ。主には相手が気を悪くしてないかどうかこうこうが焦点になるが。言い方を変えれば、相手の顔色を窺っている、ということだ。これもやっぱイメージが原因なんかなー。

ストローを離して、頬杖をついて笑つてみる。

「せつか？ まーちょっと寝不足だからな。そのせいかも」

「寝不足……？」

「おお。化け物に襲われる夢見ても」

「ば、ばけものー…？」

いちいち律儀にいい反応をする御端に笑みが深くなる。こう、からかって遊びたくなるタイプだよな、御端つて。もつまつと怖がらせるのも面白いかもしれない、と少しばかり思つたりもするが、後のフオローが面倒なのでそれはしない。

「そ。ま、ちやーんと倒すけどな

「や、やつつけたの？」

「おお」

「す、すこーーー！ 井澄くん、強いんだねー！」

夢の話つことになつてんのこ、御端はそれが現実のことのよう³にキラキラしたまなざしを俺に向ける。……ちょっと恥ずかしい感じもするけど、楽しそうな御端の反応に満足して、中断していた

昼飯を再開する。御端も安心したのか、つられて再開する。俺が元気ないんじやないかと心配していたことすら、なかつたことみたいだ。面倒なところもあるけど、簡単なところもあつて助かる。

そういうや真嶋は……と、部活でもクラスでも一番騒がしいやつの姿を探すと、石橋と笑いながらパンを食つていた。

石橋も俺たちのクラスメートで、出席番号の関係から野球部以外で入学当初からよく話をしていた。最初の頃は俺と石橋で会話をしていることが多かつたが、気がつくと真嶋と石橋で話をしていることが多くなっていた。妙にウマが合づらしい。多少の寂しさみたいなものはあつたが、まあそのおかげで俺と御端は落ち着いて昼飯が食えるようになつたわけだから、ドラママイゼロ、結果オーライだ。

今も、でつかい笑い声が聞こえてくる。また馬鹿な話してんな、あいつら。さすがにここで口話するほど馬鹿じやないだろうけど。空になつた弁当箱のフタを閉めて、購買で買つてきたパンを手に取り、封を切る。そして、出てきた焼きそばパンに齧り付い

「よつべ食べるなー。野球部の練習つてそんなキツイの？」

……声が、聞こえた。すぐそこから。

どつかで聞いたことがあるよつな、気がしなくもないけど。どつにも声の主の姿が思い浮かべることができず、首を回して机の横を見た。斜め右下、スカートだつていうのに気にした様子もなくしゃがみ込んで机に手をかけてこっちを見ている女子が一人。

……誰だ？

肩につくつかないかという長さで、ゆるくくせのついた髪の毛。下から覗き込んでくる大きな瞳はどこかいたずら好きそうな光を抱えている。

どつかで見た……気がしなくもないが、名前が出てこない。記憶力はそんなに悪くないはずなんだけどな、とぼんやり眺めていると、相手が楽しそうに小さな声で笑つた。

「うーん、やっぱわかんないか。あの時は結構暗かったからね」「

そう言って、相手は「だからキャスケットを持ち出して、すっぽりとそれを被つた。そして、キャスケットの影から瞳を覗かせ、俺を見上げる。

唐突に、記憶がフラッシュバックする。

驚愕と衝撃で勢いよく腰が浮いた。イスががたんと大きな音を立てるが、気にしていられない。目を丸くして、なにか言おうと口が動くが、うまく言葉にならない。そんな俺を見上げ、女は満足そうな笑みをキャスケットに下で浮かべた。

「や、一週間ぶり。元気そうだね」

間違いない。こいつは一週間前のあの女だ。魔法の杖みたいなもんを持つて、魔法みたいなもんを使って、狼のようで狼じやない黒い獣と戦つた、あの女。

「お、ま……!? なん……!?」

「おー、いい驚きつぱり」

ようやく声が出たが、しかし意味のある言葉にはなつてこなつた。そんな無様な俺の姿を、女は楽しそうに眺めてくる。

ふと、横と背後から視線を感じた。

横にいる御端は最初から俺と話をしていたからしかたがない。御端の場合、気になるといつても身を乗り出してくるほど積極性がないから害はほとんどない。が、石橋と馬鹿話に花を咲かせていたはずの真嶋まで興味津々かつ無遠慮にこちらを覗いてくる。おまけに石橋まで一緒になつて。だれ、だれ、と面白がるのがものすつげーうざい。

「お前らちょっと黙つてろー。」

「えー、なんだよー」

俺が怒鳴つても、真嶋も石橋も気にしない。驚いてビクついたのは御端で、苦笑したのは問題の女だった。

「あー、悪いね。今日は顔見に来ただけだから。井澄くん、明日ミーティングのみで早い日でしょ？ 話はその後にしよう」

「……なんで明日がミーティングの日つて知つてんだよ……」

「だつてうちのクラスにもいるもん、野球部」

驚く俺を尻目に女は立ち上がり、体を反転させながら、しかし顔だけはこっちに向けたままで、にんまりと笑みを浮かべて言つ。

「一年一組の城井灯子。またね、井澄くん」

そうして、楽しそうに一年九組から遠ざかる女の姿を見送つた。俺も御端も呆気にとられ、動くといつ選択肢を数秒の間忘れ去つていた。俺でもわけがわからないから、御端はもっとわけがわからないだろう。

とりあえず、あいつが俺の部活（そついや名前も呼ばれてたか）を知つていた理由はわかつた。まさか同じ学校だったとは……。一組、つつーと、たしかに野球部の仲間がいる。林田と葉狩だ。それならたしかに、部活の予定の大まかなところは流れてもおかしくない。

……いや、待て待て。やっぱおかしいって。一組の女がなんで九組の俺のことなんか知つてんだよ。一組と二組とか、九組と十組つてんならまだしも、一組と九組じや接点なさすぎじゃねーか。後で調べたってんならまだしも、事前にとか……ないだろ。ナイナイ。

まさか、全校生徒把握してるなんて漫画みたいな設定じゃねーよな。
だとしたら引く。…… そうじゃなかつたとしたら、俺はあの事件に
遭遇する前から、あの女となんらかの関わりがあつたつてことにな
る。俺のほうはまったく覚えがないんだが。

「井澄の友達かー？」

「なんか変わった子だな」

真嶋の質問には答えず、石橋の感想には胸中で同意し、俺はあき
らめのため息を吐き出し、席について昼飯を再開する。真嶋と石橋
は少しつまらなそうに、一いちらもやはり昼飯を食べ出す。御端がし
ばらきょときょと俺を見たり廊下を見たり真嶋や石橋を見たり
と忙しかつたが、そのうち落ち着いて弁当のおかずを口に運び出し
た。

焼きそばパンをすべて胃の中におさめると、もつ一回ため息をつ
きたくなつた。

……あいつと俺の関係なんて、俺のほうが聞きたいへりこだつ
一。

件の女 城井が俺に再度直接コンタクトを取つてくれることはなく、変わったことはひとつもないまま部活のミーティングが終了した。

もしかして忘れられたのだろうか、とひらりと考えながら、真嶋や御端とともに自転車の元へ向かうと、自転車のかごに張り紙がされていた。「屋上にて待つ」と書かれている。差出人の記載はなし。しかし、こんなことをするやつの心当たりが他にない。タイミングもばっちりだ。

普通に言いに来いつていふか最初に言え、あの馬鹿。にしても、よく俺の自転車覚えてたな、あいつ……。

脱力しつつも妙に感心して立ち廻りしていふと、両脇から真嶋と御端が覗き込んできた。

「あ、昨日の、城井つてやつかー？」
 「屋上、だつて」
 「……ちょっと行つてくるわ。じゃ、また明日な」
 「おー！ がんばれよー！」
 「が、がんば、つて……？」
 「なにをだよ。

真嶋の意味がわからないエールと、御端自身よくわかつていらないらしいエールを背中に受けながら、屋上を目指す。

まだ日が暮れていない、うつすら橙色と紫色に染まつつある校舎の中を歩くと、どういった理由があつたのか知らないが居残つていた見覚えのない女子二人とすれ違つた。楽しそうに話をして通り過ぎていく彼女らに視線を向けたのは一瞬で、その一瞬にも足が止まることはなかつた。

昼間の喧騒が嘘のような廊下を歩いていると、ふと不思議な気分がじわりと滲み出し、しみこんでくる。こんな時間に校舎の中を一人で歩くのは初めてかもしれない。大抵は外で部活にいそしんでいる時間だし、ミーティングだけの日はそのまま家に帰るし、そもそも校内で一人で行動することが少ない。いつも過ごしている空間なはずなのに、まったく別の場所にいるような錯覚がどこからか湧き上がってくる。

どこかふわふわとした心地で階段を上りきり、屋上へと繋がるドアの前で立ち止まる。

隔てるものはドア一つ。だといつに、気持ちは一転、妙に引き締まる。

この向こうは、別の世界だ。さっきまでの錯覚なんて田じやない。夢だったんじやないかと思うような出来事。なのに、あの記憶中の登場人物が昨日、俺の目の前に改めて現れた。そいつは、「話をしよう」と俺を誘った。その話の内容は、やっぱり一週間前の出来事についてなのだろう。それ以外に、俺とあいつに間には、なにもないんだから。

ここで、屋上のドアに背を向けて、その権利を放棄することもできる。城井灯子と名乗った女は、「話をしよう」とは言つたけれど、そこに強制の響きはなかつた。「絶対來い」とは言われなかつた。あの夜、大怪我をしながらも俺に「逃げろ」と言つたあいつは、多分、俺が誘いに乗らなくとも構わないと思つてゐる。あいつの「話をしよう」とつていうのはつまり、話を聞きたいなら話す、聞きたくないなら聞かなくていい……そういうことなんだと思う。

選択権は俺の手にある。

右手を開いて、見つめて、拳を握る。なにもない手のひらに、あの口握った剣の感触がよみがえる。そして、城井が俺に杖を向けて言葉を紡いでいた間、誰かがなにかを言つていたような気がした、ということを思い出した。あれはいつたい誰なのか。なにを言つていたのか。俺に、なにを伝えたかったのか。

「……ひひ」

覚悟は数秒で決まった。

俺は拳をほどき、手を前方のドアノブへと伸ばし、軽く捻る。屋上のドアはなんの抵抗もなく開いた。途端、冷えた風が隙間から流れ出てきた。それでもドアを閉めることなく、完全に開け切つてしまふ。

屋上への出入りを禁止する学校も多いらしいが、うちの学校では基本的に開放されている。落下防止に背の高いフェンスが外周に沿つて隙間なく並んでいて、ベンチも四つほど設置されている。昼休みなんかはここで弁当を食べる生徒で結構にぎわっていて、俺も御端や真嶋と一緒に、時折だがその中に混じることがあった。寒くなつてきてからは近寄つてもなかつたけどな。

そういうえば、放課後の屋上に足を踏み入れたのは初めてだ。

屋上は見晴らしがよく、風も非常に気持ちいいのだが、屋外だ。当然夏は暑くて冬は寒い。演劇部なんかが時折ここで発声練習したりしているらしいが、ここ数日で急激に秋から冬へと移り変わつてきたため、好き好んで屋上に来る生徒の数は激減したことだらう。屋上に出てすぐに、城井の姿を発見できた。城井は校庭とは反対方面的のフェンスに背中を預けて座り込んでいて、俺に気づくと、「や」と簡単な挨拶をしてきた。俺はそれに答えず、城井に近づいて、その真正面に立つた。そんな俺の態度に、城井は気を悪くした様子を少しも見せず、へらりと笑つて見せた。

「いやー、悪いね、こんなに遅くなつて。本当はもっと早く話ができたらよかつたんだけど。昨日やつとこを普通に学校に来れるくらいに回復してさ。その後、怪我の具合はどう?」

「もうほとんど平氣だ。……そつちこや、あの時の怪我、もういいのか?」

城井が回復だなんだと言つてゐるのさ、おそらく……どうひか確實に一週間ほど前の事件で負つた傷についてだ。

あの後、俺に意識はなかつたんだから、こいつは一人での場の後始末をして帰宅したことになる。戦闘の痕跡を消し、俺と俺の自転車を俺の自宅まで運んだ。どうやってかは知らないが、少なくともそれだけのことはしたはずだ。それを考慮ると、ものすごく申し訳ない気持ちになる。怪我人（しかも重傷の女）になにさせてんだよ、俺。

沈む俺とは裏腹に、城井はなんてことないよ。

「《ウイザード》の力を使ってる間は回復が早くなるからね。もう日常生活にはなんの支障もないよ」

「……《ウイザード》？」

聞きなれない単語を繰り返してみる。

「うふ、暫定的にね、そう呼んでるの。《魔術師》だから、《ウイザード》」「……魔術師ときたかよ」

ため息をついた俺に、城井はきょとんとした。ものすごく不思議そうだけど、お前の言つてることのほうが俺には不思議だ。

「え。なにその反応」

「なつて。突然魔術師だなんだつて言われてもわけわかんねーよ、普通に。だいたい、こないだのあはなんなんだよ。ちゃんと説明してくれんだるーな？」

「……え、あれ？ ちよ、ちょっと待つてよ？ あの……あの、さ

……《ナイト》の記憶、見てない？」

「なに言つてゐるかわつぱつなんだナビ。なんだよ、《ナイト》つて

言つて返せば城井はますます困惑した顔をする。記憶つて言われたつて、なんのことかわつぱりわからない。

……ん、待てよ?

「……そつこや、変な夢は見た氣がするな

「どんな!?

「なんか、女の子がいて……えーっと、なんか守つてやる、みたいな決意した氣がする。そんだけ

「あちやー……やつきたかー」

俺の問いに対する答えを聞き、城井は頭を抱えた。
なんだつてんだ、いつたい。

「つて」とは一から私が説明しなきやなのか。うーん、どうから話したもんかなあ

なにやら考へていいのうので、城井から言葉が出てのを待つてかとも考えた。ナビ、迷つてゐなまづ俺の疑問に答えてほしこ。一週間前からずっと、もやもやしたものが頭の中をぐるぐる回つて、少し気持ち悪いし、どうにも落ち着かない。なんていうか、魚の小骨が喉に引っかかったまんまとれない感じ。

「なあ、じやあとりあえず俺の質問に答えてくんね?」

「内容は?」

「俺、あの晩家に帰つた記憶ねーんだけビ。もしかしなくても俺のこと稼まで運んだのか?」

「うん」

あつさり肯定が返ってきた。

じつと城井を観察する。どう見ても標準以上に筋肉がついているよつには見えない。今は城井が座り込んでいるのでわからないが、あの夜の記憶がたしかなら背は俺より低いはずだし、上半身は制服や「トーに隠れて見えないがスカートから伸びる足は明らかに華奢としか言えない。隠れている腕も似たようなものだらう。俺や自転車を担いで運んだと考えるのは、かなり無理がある。

「《魔術》ってやつでか？」

「お、魔法とは言わないんだね」

「《魔術師》なんだろ？」

「うん。まあ、その辺の明確な定義はないから、同義と考えてもらつてもいいんだけどね」

城井はそう言つが、《魔術師》の業なんだから、《魔術》って言つまつがしつくつくる。

「やつぱそつか。具体的には、どうやつたんだ？」

「ちよつと《風》を使つてね、君の部屋の窓の鍵をちよいと開けて、直接放り込ませていただきました」

「……待て。お前なんで俺の部屋の位置知つてんだよ

「秘密！」

「おここらー！」

「冗談だつて。後で教えてあげるから、今は置いといてよ」

先日の一件からわかつてこる」とだが、ここつは相当頑固だ。「言わない」と言つたらマジで言わない。今はこの件についてはこれ以上追及しても無駄だらうな。

ため息をついて、次の質問へ移る」とにする。

「……じゃあ、おふくろの記憶は？　おふくろ、俺は帰つてきてそのまま部屋行つちまつたつて記憶してたんだけど。しかも俺が買った牛乳受け取つたことになつてつし。……まあか、記憶いじつたのか？」

「そんな複雑なことしないよ。ちょっと暗示をかけただけ」「暗示……？」

そういうや、俺に対しても最初はなんかそんなよーなー」と言つてた
な。

「そそ。実際は違うの、まるでわざわざあつたかのように錯覚せられるの。……催眠術みたいなもんだね。わざわざやつまでするべきかどうかは迷つたんだけど……」「…………」

「なんだよ?」

顔見られたや二て

卷之三

「電車とかね、やっぱ面するじやん。それで、井澄くんのおばあさんが出てきちゃつたんだよね。『孝弘一、牛乳買ったー?』って。いやさすがに焦つたわー」

「やうがよ……」

そうは言つが、緊張感の類はまるで感じられない。本人は「迷つた」なんて言つてゐるが、もしかしたら最初からいくらかはそのつもりでいた可能性もある。暗示かけなきや、おふくろが知らない間に俺が帰つて部屋に戻つたことになつちまうからな。靴も俺の部屋にあつたし。

自転車といえば……。

「そういや、俺の自転車、壊れてたはずだと思ったけど。俺の記憶違いいか?」

「曲がつてるのは直したよ」

ストレートな返答じゃなかつたけど、つまつ壞れてたんだな、やっぱ。で、直してくれたんだな、やっぱ。

「そつか。サンキュー」

「いえいえ。……物は直せるんだけどね。体の傷は無理だったから。背中とが、まだ痛いんじゃない? 「ごめんね」

「いや、ほんくらこはどーってことない。ま、着替えにほん矢を遣つてるけどな。ばれた時の言いわけめんどうだし」

「そつか……いやでも、背中は確実に私のせいだしね。ほんと「めんね」

「もーいいつて。じゃ、次な。……あの狼みたいなのはなんだつたんだ?」

城井が一瞬目を瞠つて、くしゃりと苦笑した。

「……すいぶん遠回りしたねー」

「でかいの先に聞くと、ちつさこのは聞くの忘れちまいそつだしな」

「なるほど、正論だね」

城井は暢氣に笑つて頷いて、

「あれは《魔獣》つてやつ

ファンタジーな単語を飛ばした。

……いや、《魔術師》とか《魔術》とか出てきた時点では充分ファンタジーだったけどな!

一瞬思考がフリーズ状態になつたが、でかいため息をついて田の前の現実に立ち戻る。

まあ、そもそもだ。

「こつやることなす」と、最初からかなりファンタジ要素を含んでこわけだから、こつが言つ分にはその単語はなにもおかしくない。

……と「う」とになるのか？ それでいいのか？ いいや、考えたつてわからねーし。

「……この世には不思議なものが存在したんだな……」

「いや、この世界のものじゃないんだけどね」

「……は？」

「あれ、『異世界』のものだから」

「……『異世界』？」

「イエス。『異世界』」

あまり聞き覚えのない単語が示す意味を、混乱する頭の中から引つ張り出す。

え、つと。それって、あれか？ この世界とは別の世界がもつ一つあるとかつていうやつだよ、な？

え、あんの？ そんなのマジであんの！？

困惑する俺とは反対に、城井は納得顔で一人頷く。

「せうだな……やつぱれ」からだよね。井澄くん、異世界の存在つて考えたことある？」

「ない」

「うん、だよね。じゃあまず異世界が存在するつてこつ前提を頭の

中に用意して

「強制かよ」

「じゃなきゃ話が始まんないんだよ。用意できた？ できたら、その異世界では魔術とかそういう不思議な力が一般的に存在するファンタジーな世界だつて設定を書き加えてね。これ大前提ね」

「……はいはい、と」

反抗しても仕方がないので、言われるままに脳内のイメージに情報書き足していく。

「私も井澄くんも、自分の魂の内側に、その異世界のひとの魂を包有してるんだよ」

「……は？」

「包有つていうか、融合に近いかなあ。とにかく、私たちの中には、もうひとり分、別のひとの魂が眠ってるの」

「突飛すぎだ。なんで一つの体に魂が二つあるんだ。しかも異世界の人間の魂つて。

疑問ばかりが出てきて、それをまとめることもできず言葉なく立ち尽くしていると、城井はそのまま勝手に話を続ける。

「今から十一年くらい前、になるのかな。その異世界から『こっち』にやつてきた一人の魔術師がいてね。その魔術師は二つの魂をこの世界に持ち込んだの。で、その二つの魂を波長があつた二人の人間にそれぞれ融合させて、最後には魔術師自身も波長の合つ人間と融合した。その融合した人間つていうのが、一人は私ね」

「……『ウイザード』か」

「そ。……元は人間だから当然ちゃんと名前があるけど、もう私の一部だからね。なんかさ、その名前で呼ぶと、一つの体を二つの魂が共有してるみたいだなって思つて、なんとなく落ち着かなくつて。

私と融合した魂は魔術師のものだから《ウイザード》。で、井澄くんと融合してゐる魂は騎士……正確には見習いなんだけど……まあ、だから私は《ナイト》って呼ばせてもらつてる

「なるほどな。じゃあ俺もそれで呼ぶことにする

別の人間の魂だつて言葉にするのは面倒だが、なにか固定で呼び名があれば少しさはそれも軽減する。俺は、俺と融合したつていう魂の元の名前を知らないし、別にそれを知りたいとも思わないから、城井の案に乗つかろうと思つた。城井は「お好きにどうぞ」と笑つた。

「で、『融合しました』……だけで話が済めばよかつたんだけど、そもそもいかなくなつたの。どうも《ウイザード》たちがいた世界から《こつち》に追つ手が来ちゃつてさ。井澄くんが遭遇した狼みたいのはそれなんだよ」

「追つ手、つて……《ウイザード》たちは犯罪者かなにかだつたのか？」

魂となつて、別の世界に逃げ込んで、追つ手がつくほどに悪いやつだつたのだろうか。でも、俺の中にある魂は《ナイト》、騎士（見習いらしいけど）だつた人間の魂だつて話だ。なんだか違和感のある仮説だつた。騎士と呼ばれる人間が全員善人かつてーとそれも違う気がするが。もっと単純に、自分の中にあるつていう魂が悪い人のものだつたとは思いたくないだけなのかもしれない。

それに応えるように、城井はふるり、と首を横に振つた。

「《ウイザード》の記憶を検証してみたりもしたけど、どうにもそうじゃないみたいなんだよね。むしろ追つてくるのが悪い奴かな、みたいな感じ」

「じゃあ、俺たちのほうが正義なのか？」

「正義なんて言葉じゃ魂は計れないよ。ただ、《ウイザード》たちは積極的に、追われるようなことをしたわけじゃないってだけ。」

「あ、いや、《ウイザード》はしたかな」

「したのかよ！ なにしたんだ一体！」

「《あつち》の法律違反をちょいとね。よくて投獄、最悪死刑って程度には犯罪したんだよ」

「ちょっとじやねーだろそれ！」

城井は笑つて視線を俺からずらし、空を見上げた。

「でも多分、追っ手がついた理由は、《ウイザード》じゃないよ。だって、法律違反程度で異世界まで追っかけてくるわけないもん。《ナイト》でもないよ。まー、「」と言つちゃうのはなんだけど、ぶつちやけた話、《ナイト》はこの件に関しては完全に純粋に巻き込まれただけの存在だから」

「あー……そういや、《ウイザード》がこっちに持ち込んだ魂は一つなんだつか。一つが《ナイト》……ってことは、他にもう一つあるわけだな」

「そう。あいつらはそのもう一つの魂を探してるはずなの。つまりだ、一週間前の狼みたいなのは、追っ手は追っ手でも、探索用に放たれたものなんだよ」

「探索用、ね……。それにしちゃずいぶん凶暴そうだったけど。んで、なんでそのもう一つの魂は狙われてんだ？」

「《特別な魂》だから、かな」

狙われているらしい魂のことを、「特別」と城井は説明した。その特別がどう特別なのか、どのくらい特別なのかわからなくて、俺は続きをじっと待つ。城井も俺の態度をよしとし、閉じた口を再度開いた。

「《ウイザード》たちが住んでた《あつち》の国には、そこを統べる王様がいる。その国と王様の一族は、《神に愛されてる》って言われてて、世界中のひとが王様を崇めてる……って言うと大げさかな。《ウイザード》はそうでもなかつたし。でも、国と王様の一族を神聖視する人はたしかにいたよ。そういう国教だしね。で、その王様の一族つていうのは、魔術師じやできないような不思議なことを実現する《力》があつてね。……例えば、そうだな……王様だったら、この学校をもう一つ作ることができる、かな」

「……は？」

「ゼロから作るんじやなくて、《コピー》することなんだけじね。そつくりそのまま《コピー》できちゃうの。そんなこと、最高位の魔術師にだつてできないよ。《コピー》すること自体は可能だけど、それはあくまで幻の一種でしかない。王様が《コピー》したものは幻じやなく、現実になるんだ。……こんなでわかるかなー。説明つて案外難しい」

「えーっと、つまり魔術師が《コピー》したものはほっときやいすれ消えるけど、王様が《コピー》したものは物理的に壊さない限りなくならないって感じか？」

「そうそうー やー、井澄くんは理解能力高くて助かるわー。御端くんの保護者やつてるだけあるね！」

「御端は関係ねーだろー！」

ようやく俺に視線を戻した城井の口から無関係の御端の名前が出たことで、俺が顔をゆがめても、城井は楽しげに笑うだけだつた。

……そりやまあたしかに、御端は話す内容が前後してたり単語になつたり足りてなかつたりして普通よりなに言つてるかわかりづらいこともあるけど、御端の言いたいこと理解するために勉強よりもよっぽど頭つかつたりもするけど、この場にはあんまり関係ないと思つ。あと、それ言つなら真嶋のがずっと理解能力高いと思つ。

「で、だ。王様の一族つてのはみんな例外なく、そんな感じで魔術師では実現できることができちゃう不思議な力……『奇跡の力』を持つてるの。その内容はひとそれぞれ違うんだけどね。……だから、王様の一族の魂は特別視されてるの」

「存在が特別視されんのはわかるけど、魂がつてのはよくわからんねーな。具体的には？」

「王族の者の魂を食らえば、その能力を手に入れ、寿命が百年延びる、とかって伝説があるみたいね」

「…………」

「それが真実かはわからんんだけどさ。『ウィザード』はその伝説に興味ないみたいで、調べようともしなかったみたいだから

「……ちょっと、ちょっと待て。魂つて食えるもんなのか？」

「食べれるみたいだよ。『ウィザード』もちゃんとした方法は知らないけど。もちろん魔術的な方法になるから、『こつち』の人間には無理なんだけどね。魂を取り出せて、魂を捕獲できて、魂を保管できて、食べることもできる。『あつち』はそういう世界つてことだね」

「うづー……」

考えれば考えるほど、気持ちの悪い世界だ。魂だなんだと言われても、見たこともないのだから現実味はない。それでも、城井が最初に言つたとおり、これはただの前提の話だ。前提であることを認めなければ、話は進まない。俺は仕方なく、それを前提として飲み込んでいく。

「で、『ウィザード』が持ち込んだもう一つの魂が、その王族のものだったのか」

話の筋からすれば、そういうことだろ？

確認をとると、城井はにっこり笑つた。

「当時の国王様の末娘。《ウイザード》は《姫》って呼んでた。だから私も、その魂のことを《姫》って呼んでる」

「《姫》だけ英語じゃねえんだな」

「だつて、《ウイザード》はずつとそのまま呼んでたんだもん。今更つて呼ぶのもなんかね。長くなるし」

「おー、それ言つたら《ナイト》は Bieberなんだよ」

《騎士》より《ナイト》のが一文字多い気がすんだけど。

「ん？ 《騎士》って呼んだほうがいい？」

「……や、《ナイト》でいい」

城井から田を逸らして答える。

思いつきで「三」を入れてはみたものの、実際呼ばれてみると激しく微妙だった。《ウイザード》も、《魔術師》よりか言いやすいしな。

《ウイザード》、《ナイト》、そして《姫》。問題の魂の呼び方はこれで固定してしまつのがいいだろ？。

「……一応確認させてくれ。城井は《姫》じゃねーんだよな？」

「私は《ウイザード》だつて言つたじやん。なによ、《姫》のがよかつた？」

「いや、もし城井が《姫》だつたら間違いなく俺のプライドが潰れる」

「あー……」

「だつて俺、よくわからんねーけど、とりあえず《ナイト》だつてんだぜ？」

《ナイト》が《姫》に守られるだなんて、笑い話にしかなんねーだぜ？

し、当事者としては情けなさマックスだ。ただでさえ女に守られてがつくりきてんのに。城井が『ウイザード』だつてことで、ちよつと救われた気分だ。……いや、女に守られた事実は変わんねーんだけどね。

話を元に戻そう。城井が一週間前戦つてたあの狼みたいなのは『姫』の魂を探している、らしい。城井があの狼みたいなのと戦つていい、とこいつ」とは、だ。

「……じゃあ城井がああやつて戦つてんのは、その『姫』を守るためか?」

「んー、まあそれだけじゃないんけど。でも、とりあえずそれが一番の理由かな」

「そいつ、知り合いなのか?」

「一年前に一回だけ会つて話はしたけどね。向こうは覚えてないはずだよ」

「なんで」

「忘れるように暗示かけたから」

「……なんで」

「知らないほうがいい」といつてのが世の中にはあるのですよ。そうは思わない? 井澄くん

「……思う」

今、また戻り、実感してゐるやう。

「でも、最近また顔を合わせたから、名前と顔くらいは覚えてくれたんじやないかなーと小さく期待してゐる

「……なのに、怪我してまで、戦つのか?」

問い合わせれば、俺の胸のうちを理解したようで、城井は苦笑した。

……いや、違う。寂しげに、笑つた。

「《姫》の融合者が私のこと知ってるか知らないか、覚えてるか覚えてないかは重要じゃないよ。私がただ、《あの子》を守りたいの。《あの子》には、笑つていてほしいの。……私にとつてはね、《あの子》を守る理由なんて、それだけで事足りるんだよ」

正直なところ、城井がそこにどんな想いを込めてるのかなんてこと、俺にはさっぱりわからない。嘘か本当か、それすらもわからなさい。

ただ、それは、その答えは……今城井が浮かべている笑顔と同じで、すうぐ寂しいものなんじやないだろうか、と思つだけだつた。

「あと、一応言つておくとね。私は別に井澄くんに『一緒に戦つて欲しい』なんて言つもつはないから」

それは、改めて言われてなくともわかつていたことだ。強要するつもりがあるなら、城井は最初から、俺に逃げ道なんて用意したりしなかつただろう。

俺が黙つていると、城井はそのまま続けた。

「井澄くんには井澄くんの生活があるもんね。部活も大変そうだし。あの狼みたいなのは、油断さえしなければ私ひとりでも大丈夫だし。……あー……この間のは、なんというか……井澄くんには目撃されちゃうわ、私は思いつきり負傷しちゃうわで、まあ、うつかり井澄くんの中の《ナイト》をたたき起しちゃつたんだよ。うつかり

ものす」べ「うつかり」を強調された。言い訳がましいとも感じられるが、城井としては本気でそう思つてているのだろう。それでも、今更だ。その気持ちが顔に出たのか、城井の表情が苦笑へと変わる。

「うなづかやうと、本当に今更なんだけどね。私はむ、《ナイト》を起こすつもりなんて、なかつたんだよ」

それを嘘だとは言わない。

しかし、城井は《ナイト》を起こしてしまつた。不測の事態が重なつた結果とはいえ、それは事実に変わりない。

自分の中にもうひとり誰かがいる。……いや、魂だけが、俺の中でひつそりと息づいているのだ。そう考へても実感はちつとも湧いてこないのに、小さな納得があつた。あの時、なにを言つてているかはわからなかつたが、たしかになにかを言つていたと思われる声は、きっと《ナイト》のものだつたんだろう。

なにを、言つていたのだろう。俺になにかを伝えたかつたんだろうか。それとも、ただ、意味なく声を上げていただけなのか。それすら定かにはならない。どんなに耳を澄ませても、言葉なんて聞き取れやしないのだ。

「あのや、城井……《ウイザード》はお前に、なんか言つたりしたか？　お前には、内側の、《ウイザード》の声が、聞こえるのか？」

尋ねると、城井はきょとんとしてじつを見上げてきた。もう二つから言葉を重ねるべきかと思つたときには、城井は答えを出した。

「声……は、聞こえないなあ。井澄くんは聞こえるの？」
「……わかんね。なんか言つてたような気がすんだけど……なに言つてんのかは、全然聞こえなかつたんだ」

素直に答えれば、城井は腕を組んで数秒考え込み、そのままのポーズで言つた。

「未練、かもね」

「未練？」

「あんま、いい死に方じやなかつたからね。……『ナイト』に限らず、だけど

「……そなのか？」

「ん。『ナイト』は『魔獣』に殺されて、『姫』は自殺だったよ

端的に死に様を告げられて、それ以上追求する気にはなれなかつた。この件については、あんまり深く聞いても、気分が悪くなるだけつて予感がした。

……あれ、ちょっと待て。今ふと氣づいたんだけ。

俺、知らなかつただけで、最初から関係者だつたんじやねーの、これ。

「……おい、城井」

「あれ？ 声が低くなつてるよ井澄くん」

「お前が最初から俺の名前知つてたのも、俺の所属知つてたのも、俺の家と俺の部屋の位置を知つてたのも……」

「……」

「最初から『ナイト』と融合した俺のことマークしてたからか！？マークだなんて人聞きの悪い。勝手に変なことに巻き込まれてないか、時々確認してただけだよ」

心底心外そうな返答に、俺はがつくりと肩を落とした。

ふいに、一際強く冷たい風が俺たちを巻き込むように通り過ぎた。俺と城井は揃つて体を小さくし、互いに改めて顔を見合わせる。無言の状態が十秒ほど続き、やがて小さく城井の口が動いた。

「……とつあえずのところは話したし、お開きにしようか」「だな……」

なにはともかく、寒い！ ポートをしつかり着込んでいるとはいっても、長時間じっとしているには、屋上は寒すぎだ。

城井が「よつせ」という声とともに腰を上げる。その動きは、どこのかぎこちない。日常生活に支障がないレベルまで回復したとはいえ、まだ完全回復には至つてないだろうに。それでも城井は学校に来ていて。そんな怪我をしてまで《姫》を守りつづねる。ひとりで。

「……なあ。俺、ほんとになんもしなくていいのか？」

思わず問いかけると、城井は心底不思議だと言わんばかりに手を丸くした。……なんかその反応、ちょっと腹立つ。俺がそういうことを言つるのが意外だといたげに見える。しかし、城井はすぐに表情を変えた。ふんわりと、優しい笑みを浮かべた。

「……井澄くんは優しいね」

「馬鹿、そういう問題じゃ……」

「井澄くんはそのままでいて。今のままで、いいんだよ」

言われていいる意味が、よくわからない。けれど、なんて返していいかもわからない。困つてると、ふふ、と城井が楽しげに笑つた。なにが楽しいのか、俺にはわからない。

「そりや、協力してくれるつていうんなら助かるけどね。でも、この件について体と命を張れるほどの理由がないでしょ、井澄くんは「ずつぱり言ひじやん……」

あんまりな言い草にひくりと頬が引きつる。

でもたしかに、城井の言うとおりかもしない。顔も名前も知らない相手のために戦つてやるなんて、俺には言えない。たとえ俺の中に『ナイト』の魂があるつて言われたつて、たとえ『ナイト』にとつて『姫』が大事な存在だとしたつて、それは『ナイト』の問題であつて俺には関係がない。『ナイト』の想いは、俺にはわからぬい。『ナイト』は俺に伝えようとしているのかも知れないけど、それでも現状として、俺にはなにも届いていないんだ。

我ながら冷たい選択だとは思つ。けれど、俺には俺の大事なものがある。

俺にとつて今の日常はある意味『特別』なんだ。野球部の活動が楽しい。クラスメートの御端や真嶋と一緒にいると楽しい。第三者からしてみれば、大したことのない、取るに足りないただの日常かもしれない。でも俺にとつて、大事なのは『姫』よりもそっちなんだ。

そんな俺の内心を見透かしたように、城井は強氣そうに笑つた。

「わかつてゐよ。だから氣にすんな！」

俺の答えは決まつていて、それがなんだか居心地が悪い。答えが決まつていて、先に立ち去るべきは俺なのに、その居心地の悪さから動けない。

それに気づいてか、城井のほうが先に動いた。

「時間、とらせてごめんね！」

城井は笑顔のまま、屋上のドアに向かう。だが、その足がふと止まり、俺を振り返った。

「あ、運動部の練習、終わるの早くなつたって聞いたけど、野球部はどうなの？」

「あー、みたいだな。今日のミーティングで五時半までにするって言われた」

一週間ほど前に発生した獵奇殺人事件の、一人目の犠牲者が出たのだ。死体が発見されたのは二日前。犯人に繋がるような手がかりは現時点ではなにもないらしいが、死体の悲惨な有様から同一犯の所業であるというのが世間の見方だ。

一人目の犠牲者は、北上里駅の西方向一駅分離れた地域から出た。今回も目撃者はゼロ。犯人の目星はついていない。被害者の体のパーツはばらばらになつていて、教室の中で聞いた話じや足りないパーツもあるらしい、とのことだ。

一件目ではまだ他人事だったここらの地域も、現場がすぐそこまで近づいたことで緊迫感が這い上がってきたのか、各運動部には学校側からしばらく部活を早めに切り上げるよう通達があつたらし。その制限が、午後五時半まで。六時だともうとつくなつちまうような季節だから、それも仕方ないことだと思う。真嶋は相変わらず不満そうだった。御端は……うん、まあ、なんだ。あいつ基本ビビリだからな。

「そつか。じゃあできるだけ寄り道しないで、まっすぐ帰つて。それから九時……や、八時半以降は外に出ないよう、周りにそれとな

「へ言つとこでへんない？」

「は？」

「あの狼みたいなのつて夜行性……とは微妙に違うかもしないけど。とにかく日中には動かなくてわ。基本的には夜九時過ぎから翌朝三時くらいまで、たまーに九時前からだつたりするんだけど、そのあたりが活動時間っぽいんだよね。だから、八時半までには家に入つてくれると、無関係の人巻き込む可能性少なくなんの」

「ふうん……」

「あと、一応私がなんとかするつもりではいるけど、もしさまた襲われるようなら遠慮なく迎撃してね」

「つて、あの剣使つて、つてことか？ あれどいつやつて出すんだよ？」

「ああ……そつか、わかんないよねそりや？」

「気が回らなかつた」といひしへ、城井は今氣づいた風に咳き、俺に向き直つた。

「見ててね。……『アリオ』」

城井が右手を俺のほうに突き出して短く呴えると同時に、その右手にどこからか光が集まつてこそ、凝縮し、それが杖の形になる。

「『デリオ』」

そして、城井の右手に現れたはずの杖は、その言葉によつて消失した。思わず「おー」と感嘆の声を上げる。ぱっと城井が両手を開いて俺に見せてきた。

「と、まあ、こんな感じ」
「せつまの、呪文つてやつか？」

「うん。基本的には、イメージすれば唱えなくても出てくるんだけど……慣れてないと逆に時間かかるから、呪文唱えたほうが簡単だよ。呪文にはちゃんと意味があつて、力があるから」「その呪文、どういう意味なんだ？」

「《あつち》の古代語で、《アリオ》は《現れる》、《テリオ》は《消える》って意味。魔術における命名規則でね。術名には古代語を使うの」

「なるほどな。とつあえず、了解」

俺が頷いたのを確認し、「じゃあね」と言つて再びドアに向かう城井の背中に、最後の問いかけをする。

「なあ、なんで城井はそんなに詳しいんだ？」

常識からかけ離れた内容をすらすらと俺に説明する姿は、少しばかり違和感を抱かせた。まるで、そこそこるのが《ウィザード》本人のようだ。

田の前にいるのは誰だろう。本人は城井灯子だと名乗った。けれど、彼女は本当に《城井灯子》なのだろうか。

城井は振り返らずにそれに答える。

「……《ウィザード》が起きたのは一年くらい前……。その時、《ウィザード》の記憶が私の中に流れ込んできた。だから、《ウィザード》が知つてることは私も知つてることになるの。さすがに《ウィザード》が生まれてきてから見聞きしたこと全部は覚えてないけど」

「へえ……」

「眠つてる魂が起きれば自然にそうなるのかと思つたけど、井澄くんを見てるとそつとは限らないみたいだね。なにか理由があつたのか……もしかしたら《ウィザード》がそれを望んだのかもしない。」

「真実はわかんないけど……『ウイザード』は私の問いかけには答えてくれないから」

「……そつか。悪かったな」

謝ると、城井はまた俺を振り返った。きょとんとした顔をしていた。

「なんで井澄くんが謝るの。謝るのは私のほうだよ……。巻き込んじやつじめんね」

笑つて、笑つて、ドアの向こうに消える城井を見送つて、城井の言葉に抱いた違和感を、言葉にする。

「……お前だつて巻き込まれただけじゃねーのかよ」

言つたつて、城井はもう階段を下つてつただろうから、届くことはないけれど。

城井の言つことが本当なら、城井も、ただ『ウイザード』の魂と融合してゐるつてだけだ。立場は俺となにも変わらない。わけのわからぬ異世界のやつの魂のせいだ、巻き込まれたのは城井も同じだ。城井の言葉が本当なら、いつたいたいにが、城井に戦う決意をさせたのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2236x/>

姫とナイトとウィザードと～ナイトの章～

2011年11月27日10時52分発行